

ところで誰を説かうか、誰に白羽の矢を立てようと思つて居る途端に、お氣の毒だが、ひよつくり君といふ金の眼前に現はれたんだよ、はは、だが嫌なら嫌で宜い、きつぱり遠慮なく斷つて貰ひたい、よく世間にある例で一應、考へて見るとか思案した上で挨拶するとか、さういふ事は君お互ひの爲に宜しくない、徹底的に躊躇のない男子の態度で瓜を割るが如く快活に返答して貰ひたい、三浦それは嫌だと一言で結構、謝絶に義理は入らなせ、内容の委細は諸否の後として、どうだい君、三萬圓ばかり貸してくれないか、いかに伯爵中の富豪たりとも、いまだ家を嗣がざる身に三萬圓と聞いて聊か驚ける岡本貞雄の顔色を、まッ黒の髻面に首肯しながら、

「いはゆる實業家でも商人でもない君に向つて、いくら財産あるにしろ、だしぬけに三萬圓は無理だらう、加之も家扶とか會計とかの面倒な奴があつて、殆ど一種の禁産に等しい境遇で、金の事は猶更ら難かしからうがね、いよ／＼君が出しても宜いと決すれば何でもない、華族の若様と高利貸を結び付けるといふやうな馬鹿な真似はしなくつても、立派に容易く出来る方法はあるよ、どうだ君、くだらない藝妓を大金で請出す奴のある世の中だ、あやしい一幅の書畫も一個の茶器も巨萬の價で賣買する今日、一番この三浦要一を三萬圓で買つて見る氣はないかね、お粗末な品だが贖物ちやアないぜ、は、ムムムム」

半面の髻を片手に逆に撫上げて、細き目尻に微笑の皺を寄せながら言葉を續け、

「君の自動車に餘計なものを二人も乗せて來て、みやげに君の金を持たして歸した上、また君に奢らして三萬圓の無心は少々、すう／＼しく面の皮の厚いやうだがね、どうせ岡本家の一粒種で君の所有たるべき全財産に對しては、實に九牛の一毛だ、それで我輩は

駄菓子だ菓子の四疊半よっぺはんを飛出とびだして生涯しやがの大仕事おほしごとをするんだよ、君きみも知る通り貧乏公卿びんぱくこうけいの家に生なれて加之しかも二番生ばんばいの我輩わがはいだが、これまで五萬まんや十萬まんの金かねを手輕てがく持もつた事は二三度どももある、しかし其頃そのころの我輩わがはい、あまり手輕てがく扱あつかひ過ぎたから金の奴やつめ實じつは怒おこつたと見えてね、大切たいせつにしてくれるところへ遁にげて仕舞しまつた、はゝゝゝだから今度こんどの三萬圓まんげんは我輩わがはい、過去くわこの經驗けいけん上じやう、出来るだけは厚遇こうぐうを與あたへて、その費途つかひみちに最も有效いちじやくならしめる覺悟かくごだが、どうだね君きみ、貸かして貰もらへまいか」

何を仕出來しでかすか、どう跳出はねだすか、たしかに凡物ぼんぶつでないといふ一種しゆの好奇心おもしろきしんを以もつて見らるゝ同族中どうぞくちゆうの名物男めいぶつおとこ、此際このさいこれを助たすける事ことまた一種しゆの興味おもしろみありと感かんぜし岡本貞雄おかもとさだを、おもはず膝ひざを進すすめながら、

「兎も角ともかくも、拵しらへて見ますが全體ぜんたい、どういふ事ことに入用にようです」

「どういふ事こと、それは君きみ、出來た上で話はなさう、出來た三萬圓まんげんを君きみの手てで握にぎつていて、もし我輩わがはいの費途つかひみちが氣きに入いらず悪いわるいと思おもへば、きつぱりと遠慮えんりよなく義理ぎりも糸瓜へちまもなく即座そくざに引ひつ込こめて宜いい、といふのはね君きみ、その費途つかひみちに聊ちやうか祕密ひみつを要えうする點てんがあるから今いまこゝで打明うちあける事は困こまる、第一だいいちまた其その祕密ひみつを聞きいて金の出來きない時は猶更なほさらら君きみが困こまるだらう、だから貸かす貸かさないは君きみの自由じゆうとして我輩わがはいは三萬圓まんげんの金かねの面めんを見みた上で話はなさう、ところで君きみどうして拵しらへる、どういふ事ことに入用にようだと問とはれて答こたへない我輩わがはいが、どうして拵しらへるとは失敬しつげいだね、あまり手荒てあらな無理むりな事をことをさしたくない、君きみの現在げんざいとしての差支さしつかひのない方法かただね」

「いや、そこは考かんがへてます、幸さいひ、親おやしい友達ともだちで銀行家ぎんこうかがありますからね」  
「や、相手あいての個人こじんで無ないかぎり安心あんしんして頼たのまう、是非ぜひ、頼たのむ、手形てがたでも普通證書ふつうしやうでも形式けいしき

上、もし我輩の名が入れば、だが三浦要の名ぢやア三文の役にも立つまい、は、は、は、

向島より銀座までの間、自動車の片隅に身を縮めしが、その窮屈代に十圓紙幣七枚を貰うて歸りし植重、高橋しげ子と共に今更の顔を見合せながら、

「ひどい目に逢つたと言うちやア濟まないが随分、今日は苦しかつたよ、岡本の若様あゝいふ方で、あゝなれば却つて何ともないが、三浦さんには驚いたね、困つたね、ふざけ半分の饒舌り續けで、まッ黒な髭の中から大きな口を開いて、のべつ幕なしに笑ひながら、わツしの肩を叩くやら、お前さんの膝を突つ付くやらね、まるで始末に終へない駄駄ッ兒だ、は、は、は、おまけに若様の紙入を取上げ、その中の金を勝手に掴み出して、さア二人とも、みやげに持つて歸れば呆れたね、だが今になつて考へると、なるほど若様

の仰しやる通り豪い人に違ひない、どうしても尋常の人ぢやアないよ、あれで華族様だといふから猶更ら驚く、後で返しても岡本君は取らないぞ失禮に當るぞと、念を押した工合は行届いたもんだ、あんな馬鹿な事を言ひながら苦勞人に出來てる、あゝいふ人と知らず、南瓜野郎と言つても怒らない筈だ、いくら取組んでも相撲になつて居なかつたんだ、は、は、は、

植重、腕を組んで頻りに悪心の首を振出せば、しげ子も思はず膝を濡めて、

「全く、あゝいふ方は、さう世間に澤山ありませんねエ」

「澤山あつて堪るもんか、あれはね、あの人だけ別に、あゝ出來てるんで、珍無類だよ、もし外の奴あの眞似でもすりやア直ぐ張り飛ばされるに極つてる、つまり、どツかに豪いところのある證據で、自然に備はつてるんだな」

「わたし、始め、花に水をかけて居た時、不意に後へ立ッて、何だか薄氣味の悪い、まア嫌な人だと思ひましたし、今日あの自動車の中へ無理に押込まれた時、どうされるかと一時は怖くなりましたよ、やはり、さういふ力で無いからでせうか、冗談ばかり仰しやる内に段々、いふに言はれない優しみが分ッて來ましたよ、あの、お顔で居てね」

「ちよいと初めは誰だッて、さう見えるが、わざと若様の傍へ、お前さんを無理に並べて置いて、途中もし奥様にでも出喰せば乃公が申譯するなんて、はゝゝゝ冗談は冗談にしろ、灰汁ぬけて意氣に洒落たところがあるよ、あの顔で、あの風で、三味線も上手だといふんだからな」

しげ子の赤らむ顔に氣も付かず、植重ますく首を振出して、胡坐の膝小僧を叩きながら、「駄菓千屋の婆アめ、うまい事をしたよ、まだ知るまいが、とんでもない豪い人を置きや

アがッたぞ、あの人なら及ばずながら此方で、お世話をして見たいね、すツかり惚れッちまつた」

すツかり三浦の髻面に惚れ込みし植重、高橋しげ子を相手に猶も首を振り胡坐の膝小僧を叩きながら、

「世間には随分、いろんな人のあるもんでね、ちよいと逢ッて見た工合は大變に調子よく出來て居るが、ごまかしの鍍金物と同じで段々、長くなるに従ひ地金が現はれて來て急に嫌な氣持のする奴があると思へば、また始めは何だか妙ちきりん、蟲の好かない奴だと思ッていながら、嚙占めるほど味の出る鼈煮のやうに、いつの間にか喰付いて堪らなくなるのもある、それを考へると現に三浦さんかア鼈の方だね、知らない内は南瓜野郎と思ッたが、ありやア鼈野郎だ、しかし野郎ちやア失禮だから鼈様といふ

かね、は、は、は、見た目は恰好が悪くツて薄氣味が悪くツて、下手に指でも出せば直ぐ喰ひ切られるが、値が高くツて味が美くツて安料理に手軽く使へないところは三浦さん、全く鼈だよ、あの鼈様あれから若様と一緒に何處へ、どうしたらうね」

「しげ子も今日は何となく嬉しく、心地よげの牙えたる顔に微笑を浮べて、  
「どうせ何處かの、お料理ナンでせう、始めから料理屋へ行くと仰しやいましたもの、あの三浦さん、御酒を召上りませうかね」

「さア、そこまでは知らないが、あの身體で、あの様子ぢやア下戸では無いらしいね」  
「お相手の方、もしお嫌ひだと、定めて、お困りでせう」

「なアに大丈夫、この上は迷惑だらうといふ事を、ちやんと心得て居て我々を銀座の角で降す時、土産を持たせて歸す人だもの、あれで萬事に行届いてるから安心だ、兎も角も

三浦さん、わッしは馬鹿に惚込んだよ、すツかり氣に入ツて仕舞ツた、は、は、は、とこね、土産に貰ツた此七十圓だ、こりやア半分、お前さん着物でも買ふが宜い、その心算で下すツたんだよ、あとの半分三十五圓の内、かはいさうだ幾何か、あの野田といふ書生に遣らうぢやないか、残りは皆お前さんの小遣にして、わッしやア入らねエ」

「まア黙ツて、さうしなさい、實は若様、お前さんに何か下さりたいといふ、お心は充分に見えてるがね、わざと控へて在らツしやるんだよ、事に依ると三浦さん苦勞人で目が早いから、その邊を察して洒落に手引をしたのかも知れないぜ、あの顔で通に出來てるよ、は、は、は、とどツちにせよ、お前さんは僥倖だ、わッしは始め危く思ツて意見をしたが、あゝいふ心丈夫な後楯が二人も出來たとすりやア、それこそ好きな女優になツて見

るが宜い、いくらカンでも植木屋の世話ぐらゐでは、却ツて生涯お前さんを女の屑にすると思つたからだよ、角虎といふ悪黨のため酷い目に逢つたが、其代り今度は運よく當てたね、はゝゝゝどうしても浮びの早いのは女だ、同じ難儀をしても野郎の方は屋根から飛降りたり腰をぬかしたり、たま〜見付けた相手に逃げられたり夜通しの雨の中を濡鼠になつて辻つたり轉んだり、さんぐの目に逢ひながら未だに沈んだまゝだ、どうかして、あの人も浮ばせてやりたいよ、あのまゝぢやア何だか片手落のやうな氣がして、わツしやア好い心持になれねエ」

青葉の間に缺の音を聞いて悠々と近寄りし三浦要一、振返る植重の顔を見るや否、

「はゝゝゝ昨日は迷惑だツたね」

「どう致しまして、恐り入ります」

「よく恐れ入る男だ、いち〜さう恐れ入る事は止した方が宜い、あれからね、岡本と二時間あまり話しながら飲んで食つてね、彼奴と別れた後また酔醒しと腹減らしに三時間も歩き廻つたから、夜になつて歸つたよ」

「道理で、お禮かた〜、實は夕方に二三度も伺ひましたが」

「馬鹿な、禮は岡本に言ふが宜い、また今日こゝへ来るよ」

「入らツしやいますか」

「十時過には必ず来る事になつてる、もう彼はその時刻だらう」

折しも垣根の横に自動車の停まりし音、

「や、来た、もし隣室の三疊に例の凹垂亡者が居ないと我輩のところへ引ツぱり込んで、無

無遠慮

理に駄菓子を食べして遣るんだがね、はゝゝゝかはいさうだから此家で逢はうと約束して置いた、あの岡本め、こゝへ来るのが嫌でないらしい、しげ子とかいふ娘、どうした、はッはッはッ、冗談は兎も角、岡本と談話をする間、誰も来ないやうにしてくれ、自己まづ座敷に上り込んで、待つ間もなく入り来りし岡本貞雄、

「昨日は失禮」

「いや、我輩こそ、ところで、どういふ工合ですな」

「大體は昨夜、あれから直ぐ話して置いて今朝、銀行で」

「ちやア出来たね君」

「出来た事は出来ましたね、少々、額の點が充分、此方の思ふやうにならないので」

「はゝア、どのくらゐ」

岡本貞雄、ポケットより百圓紙幣の一束を三浦の前に差出し、

「どうしても都合上、此方でなく向ふの都合上、それだけより承知しません、銀行に居る

奴は、なかく頭が固くツてね、おたのみの三分の一で」

「一萬圓だね」

三浦要一、さらに思案の小首を傾けず、まッ直に其まゝ一萬圓を押し戻し、

「ありがたう、義理も何もない突然の依頼を、加之も久し振で逢つた我輩の言を信じて、

よく拵へてくれた、その點は有難く感謝するがね君、必要は三萬圓で一萬圓ぢやア仕方

がない、十圓の物を買ひたいが三圓の品で堪忍するといふ金でないから、そりやア君、

今日、すぐ銀行へ戻して貰はう、いづれ手形か何か入れたんだらうが、その手形を取り返

して破ッて貰はう、我輩また誰か外の奴を考へるからね、あしからず君、無論、三萬圓

無遠慮

と一萬圓の如何に拘はらず君に對しては深く感謝する、悪く變に思ツてくれないやう、  
どうだ君、もし氣持がよくなければ一枚だけ借らうかね、百圓なら百圓で我輩の三萬圓  
よりも嬉しがツて助かる奴があるんだよ、金といふもの數の多少でなく人間の程度と仕  
事の工合だね、はゝゝゝ」

一萬圓を返して三萬圓と同じ感謝の言葉を残し、其中より百圓紙幣一枚を借り受け、ぶら  
りと駄菓子屋の四疊半に歸り来るや否、破れ障子を引開けて隣室の野田幸吉に向ひ、

「どうしてるい、少しは氣分でも持直したかね、ろくでもない過ぎた事を君、いくら考へ  
ても無効だぞ、ぐづ／＼せずと、しツかりしろ、糞壺の蛆蟲だツて向上心といふものが  
あツて這ひ上るぢやアないか、はゝゝゝ」

貴様ア蛆蟲にも劣るぞといはれても、さのみ反響のない幸吉、ぼツとして今なほ氣ぬけの  
如く、蒼ざめて瘦せこけたる顔を上げながら、たゞ額越に會釋するのみ、流石の三浦も聊  
か持餘して、

「おい、も少し元氣を出して血の廻りを好くしろよ、それでは君、まるで生きた人間にな  
ツて居ないぜ、一番ウンと身體に力を入れて四股でも踏ンで見ろ、ふらく／＼として倒れ  
たら介抱をしてやるよ、どうだ、何とか言はないかい」

「ありがたう、御坐います」

「禮をいふぢやアないよ、何とか自分の思ツてる事を、つまり今までの事を捨て、仕舞  
ツて、これから前途の考へを何とか口へ出せといふんだよ、あの植重だツて一時、こゝ  
へ置いたゞけでいつまで、際限なく世話をする義理も約束もないんだからね、どうせ自分



で自分の始末をしなければならぬ。もし今日でも、こゝを立ツてくれと言へば、どうする心算だ」

「どうしたら、よう御坐いませう」

「それを此方から聞いてるんだ、人に相談せずと自分で、どうするとか、また断うすると考へて見るといふんだ」

「その考へ、付きません」

「その考へが付かなくツて、こゝを出れば、のたれ死するより外アないぞ」

「仕方、御坐いません」

「は、ア、死んでも宜いのか」

「別に、宜いといふ、わけも」

「だツて、結局、さうなるぢやアないか」

「さうなれば、いッそ、死んだ方が」

人を手鞠に取る三浦の髯面も、これには呆れて暫しの無言、おもはず嘆聲を漏しながら、「かはいさうに、ちよいとした一時の間違ひで染められた皮相上の色合だから洗ツて取れるものと思ツて居たに、そこまで深く頭脳の中へ腐り込んでるかなア、こりやア君の罪ぢやアない、全く今の若い奴を事こゝに至らしめた戀愛誤解の罪で。恐るべき一種の時代病に罹ツてるんだ、困ツたね」

流石の三浦も野田幸吉には呆れて髯面を皺めながら、いかにも哀れげに其顔を打守り、「どういふもんか近來、君に限らず、そんな顔をしてる人間には悪い癖がある、ちよいとした事にも狼狽へ廻ツて狂氣のやうな大騒ぎを遣らかしたり、つまらない馬鹿げた尻の

やうな事にも直ぐ行詰ツて仕舞ツて、至極お手輕に死といふ事を口にするが現在、君も今、仕方がなければ死んでも宜いと言ツたね、はゝゝゝ冗談でなく實際、さう死んで見たいのかね、全く君、死にたいのかい」

「いへ、別に、死んで見たくもありませんが、餘儀なく」

「大體その餘儀なくが間違ツてゐる、餘儀なくといふ事はね、シツかりした人間の智慧を絞リ努力を盡した結果、いはゆる背に腹は代へられない時の決心で、生意氣に君等のやうな人間が、どう餘儀ないんだ、第一また背に代へる腹の中に何があるんだい、はゝゝ加之も今日の時勢に死といふものは、國家のために戦死するか戀のために情死するか、公私の善惡論は別として、この二個の外にないんだ、ところで君の身體ア徴兵検査にも外れたらしいから戦争があツても出て死ぬ事は出来まい、また情死するほど惚れて迫られ

る相手はなし、たま〜思ツた女はあツても、そいつに逃げられるし、もし金でもあれば強盜に殺されまいものでも無いが、その恐れは一切なし、人の怨みを受けて双物三味されるほどの人間には出来て居ないし、どう考へても、いくら探しても、これといふ君の死場所はないぢやアないか、はゝゝゝ生きてる、はゝゝゝさう慌てずに生きて居るよ、しかし今こゝを出ちやア食ふに困ツて餓死するといふなら、それだけは我輩。助けてやらう、意氣地なしの骨頂だが、のたれ死と餓死は別だ」

袂より掴み出せしは、十圓五枚と五圓五枚一圓紙幣十錢紙幣まで取交せて都合百圓、

「こりやアね、ある奴から取ツた百圓紙幣を、あの植重に命じて取替へさせた金だ、これを君に遣る、たツた百圓の金だが時と場合、今の君には少くとも三月以上の生命が保てる、いくら頭惱の中が變になツて居ても三月以上、どツかの屋根の下で夜露に打たれず

氣樂に飯が食へると思へば、心に自然の餘裕が出来て、また分相應の考へも浮ぶだらうからね、これを持ツて君、すぐ今こゝを出ろ、いつまで着い面をして此家に居ても何の効はない、のみならず縁も義理もない人の世話になつてるのは氣兼ねだらう、この百圓で國へ歸れの東京に止まつて、かういふ事をしろのと、そんな指圖はしない、たゞ百圓だけ食ツてる間に何とか自發的の考へを出せといふんだ、もし出なければ百圓を食ツて仕舞ツた上で、餓死しろ、わかツたか、わかツたら後ともいはす今、すぐに去るが宜い、無論あの植重に挨拶は入らない、後で我輩よく言ツて置いてやるからね、まツすぐに土堤へ上ツて其まゝ左へ向いて行け、右へ行くと向島の奥で、また雨に降られて迂り轉ぶぞ、はゝゝゝ」

逆も度すべからざる奴とは思へど、差當ツての救助に百圓の金を與へて野田幸吉を駄菓子屋の三疊より送り出せし三浦要一、その歩む姿を見ながら、

「これといふ病氣があつて、さうなツたンでは無いからね、しツかり氣を持直せば達者になるよ、腰の工合も始めて見た時よりは、よほど宜いぜ、もう杖は入るまい」

「ありがたう御坐います、おかげさまで」

「これからア君、女に限らず何者に向うても、憧れたり、悶えたり、囚へられたり泣いたりするやうな、そんな意氣地のない消極的の凹垂れた根性ぢやア無効だぞ、あらゆる人事一切の被征服者とならず、やるだけ遣ツて、いけなければ止める、するだけの事をして出来なければ断念するといふ、きツぱりした態度で、萬事を征服して行くんだ、さうすれば譬ひ破れても潰れても悔ゆるところなく、寧ろ男子の一快事たるを失はない、つまり人間はね、成敗とも面白味を感じて活躍すべきもんだよ、ところを君等ア殊更に愚痴

ツぽい未練氣の多い悲觀材料ばかりを探し歩いて、わざ／＼泣蟲になる稽古をするから間違つてゐる、蟬だつて蟋蟀だつて、ありやア君、悲しくつて泣いてるんぢやないぜ、

あゝ好い工合だと氣持よく嬉しがつて唄つてるんだ、はゝゝゝゝ」

植重の生垣に添うて、幸吉、おもはず入口に立停れば、三浦これを追ふが叫くに、

「寄らなくつても宜い、ぐじ／＼と面倒だ、後で我輩、よく言つて置いてやるよ」

「ですが、あゝいふ、お世話になりました」

「あまり失禮に當るといふんだらうが、今のところ、どうせ失禮の仕續けだ、他日また改めて立派な挨拶しに来るが宜い、それとも君、同じ災難に泣いて抱合つたといふ、あの娘の顔でも見たいのかい、はゝゝゝゝ」

「いへ、決してさういふ、そんな事は決して御坐いません、たゞ一言お禮を」

「なアに冗談だよ、はゝゝゝゝ植重に一言の禮なんか入らない」

「では、後で、どうか、よろしく」

「よし／＼、承知した」

須崎を出でて向島の土堤に近づきし時、幸吉は振り返りて、幾度も頭を下げながら、

「どこまで、お出でになるんで御坐います」

「どこへも行かない、君を送つてやるんだよ、つまり君のね、これから世の中へ出直すべき首途を送つてやるんだ、ひよろ／＼せずと、しつかりしろよ」

「あゝ有難う御坐います、この御恩は、生涯この御恩は」

「我輩に對する事なんか忘れても宜い、自分の前途に對する事を忘れちやア無効だぞ」

現在、これ以上に彼を救ふ道なく、差當り外に彼のため施すべき策なしと、野田幸吉を向

島の土堤まで送り出せし三浦安一、

葉櫻の茂れる蔭に力なく、とぼくと歩み行く後姿を見て、險しき人生の行路、いかに成行くかと哀れに思ひし時、振返りて腰を屈めし幸吉、三浦は脊骨を叩くが如き勢ひの右手を宙に振りながら、この意氣地なし奴、まっ直に行けとの指圖、

彼奴、もし我身の弟でもあれば、どうしてくれようかと、ぶら／＼歸り來る生垣に添うて植重の門口、其まゝに歩み入れば、下枝の青き葉に白き手を差込める高橋しげ子、

「やア、何をしてるね、木の葉の蟲でも取ツてるのかい、これほど廣い庭には澤山ある植木だ、少しの蟲ぐらゐ生かして置いてやれよ」

例の自動車以來、しげ子のため此髯面は恭しく、また何とやら一種の懐かしみを持ちて、猶更ら滾るゝ笑顔の愛敬、

「さへ、只今、別に用も御坐いませんから、遊び半分に、枯葉を取ツて居ります」  
「あ、さうか、ぢやア植重の手傳ひを始めたんだね、はゝゝゝとところで今、お前の色男を送ツてやツたよ」

お前の色男といはれて、冗談にもせよ、もしや岡本子爵の事かと、おもはず赤らむ顔を、さも面白げに見ながら、

「あの色男には全く困ツたよ、この門口を通る時も頻りに這入りたがツてね、それを我輩實は聊か焼けたから、わざと意地わるく無理に急ぎ立てゝ遣ツたが、後で考へると少々わるいさうだ、今ごろ枕橋の邊を歩いてるだらう、どうだい、追ツかけて慰めてやらな  
いか、まだ吾妻橋まで行くまい、はゝゝゝ」  
「御冗談ばかり、はゝゝゝ」

無遠慮

「しかし誰の事だと思つてる、その色男を」

「存じません」

「薄情だな此女、存じませんで済むかい、互ひに抱合つて泣いた事があるといふのぢやないか」

「あら、あの、野田さん、まア酷い事、ほゝゝゝ」

「何が酷い、それとも外に色男と思つてゐるもの、あるかね」

「遁げ行かんとする袖を捉へて、軽く片手に背を撫でながら、俄かの大聲、

「植重、植重ッ」

何事かと驚いて走せ来る植重に向ひ、まッ黒の髯面を突出しながら

「加勢してくれ、我輩これほど口説いてるに此女、きかないよ、やはり岡本の方が好いと

吐してね、はッはッはッ」

植重も思はず手を拍つての大笑ひ、

「そりやア三浦さん、御無理で御坐います、失禮ながら比較物になりませんよ、はゝゝゝ」

「や、貴様が見ても、さうかね、はゝゝゝ冗談は置いて實際、いかによ、だしぬけに女の袖を掴めば驚いて、きやツと叫ばるゝ筈を笑つて居られるには、閉口だ、あまり手應がなさ過ぎる、いよく我輩も女に近寄つて安心されるやうになつたかねエ、心細いこつ

た、はッはッはッ」

圓轉滑脱、酒々落々、しげ子に戯れながら、のそりゝと植込の間を歩みて、我家の如く例の縁端に腰うちかけし三浦要一、まだ笑ひ顔の消えざる植重に對ひ、

「白い薄絹に紅を包んだやうな肉體美の張切つた若い女といふものは、いつ見ても氣持の

「好いもんだに世間の奴等、どうして眞正面から見ないんだらう、わざ／＼離れて尻目にかけたり横目を使つたりする奴の氣が知れない、そのくせ、さういふ野郎に限つて油断のならない事をするから訝しい、はゝゝゝだが今いふ通り、だしぬけに袖を掴んでも驚かれず、平氣に笑つて居られちやア我輩、もう無効だな、つまり女に對する危険性のないものと安心されるので、結局、問題の價値を失つたんだ、はゝゝゝ」

「なアに、さうぢや御坐いませんよ、女といふもの、あまり自分より懸放れて豪い方には到底、及ばないと諦めるからで、はゝゝゝやはり世の中は何事に依らず同じぐらゐの双方でない、しつくり合はないと見えましてね」

「や、なか／＼巧い事をいふね、その調子で植木を高く賣込むんだな、はゝゝゝ冗談は置いて隣の三壘に凹垂れて居た奴、あれを今出して仕舞つたぜ」

「おや、何處へで御坐います」

「どこか分らん、どうして何處へ行くか分らないがね、あゝして置いても仕方がない、のみならず第一また本人のために善くないと思つて、兎も角も、種々と言聞かした上、岡本から取つた百圓ね、あれを兵糧に遣つて出したよ、當分まア飢死の恐れもなく、どツかの安下宿でも探すだらう、その間に目が覺めて今までの事を後悔すれば彼の幸福だ、もし百圓を茫然と食つて仕舞つた後で、首を吊らうが水へ飛込まうが、もはや自業自得で本人の勝手ぢやアないか、そこまで世話ア出来ないよ、また實際すべきもんでない、彼奴の分相應あのくらゐで宜からう、無論こゝへ寄つて禮を述べたいと言つたがね、面倒だから我輩それに及ばないと止めたが、とんでもない厄介だツたね、はゝゝゝ」

植重また俄か感嘆の首を振出して、おもはず聊か反身の横手を打ちながら、

「へエ、あの百圓、さういふためて御坐いましたか、道理で、いろんな紙幣を交せて來いと、なるほど、へエ」

「ひどく感心するね、我輩は有餘る岡本から取ツて哀れな彼奴に遣ツただけだよ、ちよいと取次いだばかりだ、はゝゝゝ」

「でも世間には、さういふ立派な取次は御坐いませんよ、おろそかに思ツたら罰が當りますね、どうか、シツかりして貰ひたいもんだ」

「ところがね、あれで彼奴まだ心の底に未練氣があツて女の事を忘れないから結局、無効かも知れない、いくら説いて聞かしても、あゝいふ人間は日向糞だ」

「日向糞、どういふ事で御坐います」

「日向糞はね、上ツ皮が堅く乾からびて中が柔かいもんだよ、はツはツはツ」

野田幸吉を日向糞に譬へて、例の髻面に大口の高笑ひ、植重も思はず笑ひながら、

「随分お口が悪う御坐いますな、はゝゝゝ」

「なアに彼奴に限らず近頃は、いやに世間體の外ばかり宗教めいたり道徳めいたり眞面目に固く硬張ツて居て、ぐちやくと中味の柔かい奴が多いよ、同じこツて、も少し上品な言葉もあるがね、人間の出來が臭くツて吐す事が鼻持のならない工合、日向糞で澤山だ、はゝゝゝ」

「なるほど、さう仰ツしやれば日向糞のやうな野郎、なか／＼御坐いますよ、現に過日も貴君、黒の山高帽子で立派な洋服を着た人が大威張で這入ツて來ましてね、さんざ庭中の植木の値を聞いて歩いて、はゝゝゝこれが三百圓か高くないよ、これが二百圓かい安いもんだ、ちよいと一晚、手を叩けば百圓は飛ぶが植木は枯れても薪になると言ひながら、



「一圓の物も買はずに歸つて仕舞ひましたよ、はゝゝゝあれも日向糞ですな」

「いや、そりや糞でないね、値を付けて買はないのは小便をしたといふんだらう」

「これは一本、まゐりました、はゝゝゝ」  
「時に岡本、今日も来さうなものだな、實は彼に一本、まゐつてやりたい事があるよ、過日の自動車で我輩、たしかに間違ひなく睨んで置いたが、どうも怪しいぞ」  
「へエ、何がで御坐います」

「とぼけるな、凡そ分つてるだらう、いくら用がなくつて氣樂な身體にしる、我輩の如き公卿の貧乏華族で加之も跳出されの二番生と違ひ、いはゆる彼は大名氣質の家に生れた一粒種だから、さう手輕くもないに、ちよいくと出られる筈がない、それを殆ど一日置きに、此處へ來るといふは植重、あれが居るからだよ、はゝゝゝどうだ、同じ事

なら何とかしてやれよ、もし古風に萬一お家騒動でも起つたら我輩、慰み半分に出して直ぐ治めてやる、安心して兎も角も、くつつけろ、双方とも喜ぶこつた、はゝゝゝ」

「困りますね、さう聞つ放しに仰しやつては、實のところ」

「實も嘘もあるかい、早いか遅いか、それだけのこつたよ」

「いへ、全く、さういふ、わけでも御坐いません、しげ子といふのは實のところ、女優になりたいたいとして、それを若様が陰ながら助けてやらうと仰しやいますので」

「女優、あれが女優になりたいのか、や、よからうぜ、あの娘、どことなく陽氣で、色彩の鮮明な工合、なるほど女優的に出來てるよ、岡本、それを陰ながら助ける、はゝゝゝやはり同じこつた、女優になる前か後かといふだけの相違だ、よし、さう聞けば我輩また別に面白い考へがある、こりやア好い道樂が見付かつたわい、はゝゝゝ」

どこまでが眞面目か、どこまでが冗談か、眞面目と冗談の境目、さらに分らぬ三浦の眞面目、日向養の講釋に高笑ひしながら立去るを、門口に見送りし植重、

「もし何か御川でも御坐いますれば、どうか御遠慮なく」

「なアに今はね、土鍋飯の目炊で無人島に流された覺悟だから、人を使つたりする用はないよ、しかし岡本が來たら知らしてくれ」

「承知いたしました、如何で御坐いませう、御夕飯に何か、持つてまわりませうか」

「いや、そんな事をするに及ばないが、これからは岡本が來る度に女優後援の税金として何か、奢らせよう、はゝゝゝ隔日か二日置ぐらゐに美味しいものが食へるわい、おまけに今日から隣室の凹垂れ亡者が居なくなつて、すつとした、彼奴、我輩を頗る弱らした

よ、どうも腐つた煮肴が傍にあるやうでね、はゝゝゝ」

だしぬけに脊骨を叩いても驚かぬ態度、のそり／＼と歩みて生垣の角へ消えし後姿を、見送りし植重、ふと何心なく振返れば、いつの間に近づきしか、くつきりと水際の立てる二五十六の美人、加之も素人で無いらしい風俗、垣根越の茂れる青葉に猶更ら浮び出でたる如く小腰を屈めながら、

「ちよいと伺ひますが今、あの向ふへ往らしたのは何といふ方で御坐いませう」  
植重は聊か不意に打たれし顔色、きよろ／＼目を見張りながら、

「どういふ、御用なんです」

「いへ、別に、どういふ用、といふでも御坐いませんが、彼方から見ました、お顔といひ後姿といひ、大變お髯が生えて居りますから、違つたかも存じませんが、もし、もしや

三浦様と仰しやる方では

植重、ます／＼目を剝いて、じろ／＼と見直しながら、

「三浦さんですが、あなたは」

「あら、やはり、三浦さんで御坐いましたの」

「お知合ですか」

「存じて居りますとも、あの後、どうなすつたかと思つて居りましたよ、今の御様子では、

この御近所ですね、是非お目にかゝつて種々、いろ／＼お談したい事が」

戯言にもせよ、一時は女に責め抜かれて逃げ出したといふ人、偕は嘘でもないと言ふ人の、

「ようがす、ようがすよ、三浦さんは御親類同様お心易く願つてますから、兎も角お這入り

なさい、わツしの言ふことは何でも聞いて下さるんです、すぐお呼び申して來ませう、お名前は」

「鈴といへば、御承知です、鈴吉と云へば、猶よく分りますが、あゝいふ御氣風の方ですから、そんなものは知らない、仰しやるかも知れませんが、そこはね、どうか、よろしく」

植重は思はず胸を叩いて、

「大丈夫、大丈夫ですよ、かうなれば三浦さんだつて、さうは言はせませんからね、は、は、」

鬼の首でも取ツた勢ひの植重、わづか二町足らずの間を、五十面さげて小兒の如くに駆け出し、駄菓子屋の四疊半を差覗けば、これを我身の天地として大の字形の三浦要一、

「慌て、何だい」

「何だちやアありませんよ、さう貴君、暢氣に寢轉んで居られますまい」

「何故、どうして」

「どうも、かうも、へへへへ」

「をかしく變な笑ひ方をするね」

「變も變、大變ですもの」

「何が大變だ」

「いよ／＼來ましたよ」

「や、岡本、來たかい」

「や岡本、來たかいで済みますかね、もう無効です、幾何お威張りなすツても現在あゝい

ふ證據の現はれた以上、もう仕方ありませんよ、しかし驚きましたな、流石は三浦さんだ、實は嘘だと思ツて居りましたに、なるほど、何處に居ても捜し歩いて、あゝいふのが來るんですからね、うるさくツて逃出したのは、ほんたうでせう、だが三浦さん、あれを蒼蠅いは勿體ない、どのくらゐ數あるか知りませんが、ありやア、ぬけてますね」

「わからん事をいふが、誰か我輩を尋ねて來た奴があるんだな」

「大あり、兎も角も我輩、さうしては居れませんよ三浦さん、すぐ來て戴きませう」

「はゝゝゝ女かな」

「落著いてますなア、此方が慌てゝ飛んで來たに本人の貴君が平氣で、さう落著いて居ち

やア困りますね、義理にも少しは驚いた風をして下さらないと張合がありませんよ」

「馬鹿な、その女、何といふ名だ」

「まア名前なにか、どうでも宜いぢやアありませんか、顔を見れば直ぐ分るんだ」

「ところが我輩、外の事は忘れないが女の面に對して至極、物覚えが悪い」

「じよ、じよ、冗談を、はゝゝゝそろ／＼また始まりましたね、植重は暇ですが相手は、かはいさうに待ッてるんですから、直ぐ、じらさず直ぐ往ッておやんなさいな、罪ですぜ三浦さん」

「ぢやア、こゝへ引ッ張ッて來い、名が分れば出かけて遣らう」

「ま何といふ贅澤です、それほどの色男にも見えませんがなア、ふしぎだ、もし野田といふ書生ッぽに聞かしたら氣絶しますぜ、はゝゝゝ」

「名をいへよ」

「名は鈴、お鈴さんと」

「鈴、はゝア鈴吉か」

「鈴吉、鈴吉、ありやア三浦さん、藝妓でせう」

「さうだ、藝妓は藝妓でも彼女、ちよいと變ッた女でね、面白ところもあるが久しく遇はない、どうして知ッて来たか、面倒なものに見付かつたよ、また泣いたり喚いたりするンだらう、蒼蠅いね、實は植重、あの鈴吉と我輩との關係は」

「おツと、その邊で御免蒙りませう、對手の出ない時さへ手厳しく來る三浦さんだ、いよ／＼女が現はれて念入に講釋されちやア堪りませんよ、おまけに泣いたり喚いたりする實地を見せられて、この植重どうなりますい、はゝゝゝ兎も角も來て戴きませう」

「はゝゝゝ、嫌だが出かけてやらうかな」

三浦要一

「一年あまり逢はないが、鈴吉、どうなツてる、片時も我輩の事を忘れずに心配したから  
嘸、さぞ瘦せたらうな」

「瘦せたか肥ツたか今日、始めて見たンですよ、は、は、は、だが三浦さん、ちよいと無い容  
貌ですな」

「美しい女だらう、加之も二十五六は花の色香の眞ツ盛り、女一代の生命だ、あれで彼女、  
至ツて氣の優しい涙脆い情の深い男思ひの親切もンだぜ」

「さやうで御坐いますかい、兎も角も三浦さん、さう悠々と歩いて居ちやア、のろけ受の  
此方が堪りませんよ、一步お先へ」

「まア待て、待てよ、いくら堪らなくツても、借金取に攻められると違ツて、女の話は堪

忍の出来るもンだ、おまけに長い道行でもなし、わづか二町足らずの間ぢやアないか」

「わづか二町足らずでも出る前に、さんざ聞かされてますよ」

「案外、辛抱のない奴だな」

「こゝまで辛抱すれば澤山でせう、この上、もう辛抱しきれませんね」

「さう短氣を出さない、お前だツて若い時は随分、女に何とか言はれた事もあるんだらう、  
まさか最初から今の鼻ア、あゝいふ粗末なものと連添ツて子まで産ませる筈ぢやアなか  
ツたらう」

「御挨拶ですね、あれでも三浦さん、女ア女で化物では御坐いませんよ、縁あればこそで  
ね、は、は、は、」

「や、うまい、その調子なら、きツと女が騒いだに相違ない、うるさく騒がれた中で、ど

ンなのが一番、よかつたね」

「叶はない、逆も貴君には叶ひませんな、すぐ玩弄にされるンだから、三浦さん、男は兎も角、あまり女を玩弄にすると、相手の怨恨よりも總勘定の女罰といふものがあつて、いくら無頼著に不死身の貴君だつて最後には、その報いが來ますぜ」

「來るかね」

「來ますとも、きつと來ますよ、わつしなンかも實は、その罰で出世を仕損つたンですか  
らね」

「やられた、やられた、油斷大敵、うツかり一ぱい食ツたわい、はツはツはツはツ  
はや生垣の入口に髻面の高笑ひ、その笑ひ聲を聞いて待ち兼ねし鈴吉、植込の間より迎へ  
出でし顔を見るや否、

「やア珍らしい、相變らず達者だな」

やア珍らしいといふ三浦の顔を、なつかしげに打守りて、

「まア三浦さア、大變お髻が生えました事、ちよいと、お見受け申しては分りませんよ、  
しかし御立派ですワ、あら、御挨拶もしないでさ、御機嫌よろしく」

「は、、、其方も達者で宜いが、どうして我輩、この邊に居る事を知ツたね」

「實は今日、この須崎町に知合が御坐いましてね、それへ用達にまゐりましたが、俵を返  
して仕舞ツたもンですから土堤へ出る道を間違へて、まご／＼して居りますと」

「今に始まつた事ぢやアなからう、まご／＼したり間違つたりするのは、もう好い加減に  
慌てる事を止めよ、は、、、」

「相變らず御冗談ばかり仰ツしやる事ねエ、ふざけないで聞いて下さいよ、すると貴君、

こゝの親方と話しながら貴君が入口に立ッて在らしツたんでせう、おや、と思ひましたが其お指ですもの、ですが後姿で、もう貴君に違ひないと直ぐ、親方へ聞いて見ましたの「いくら髯が生えたにしろ、人間には裏表といふものがあツて、看板は面で分る筈だに後向で分ツたとは我輩、よほど世間と反対だな」

「ほゝゝゝ裏も表もないンですが、向ふの方へ例の調子で、のそ〜と一風、どうしても變ツて在らツしやいますよ、ほゝゝゝ」

「心得置くべきこツた、これから借金取と女には、眞正面を向けてやらう」  
「三浦さん」

「何だい」

「何だいちやアありません、かうして今日お目にかゝツた以上、そんな、くだらない御冗

談ばかり聞いては居りませんよ、全體まア貴君、あれから、どうなさいましたの、いつ頃から、こんなところに隠れて在らツしやるンです」

「さア、そろ〜始めたな」

「どうせ、始めますよ、其お覺悟で、よけいな入撥なしに、わたしが聞くだけの事を、すツかり打明けて下さい、もう貴君を遁しませんからね」

「わるい日だ、とんでもない女に擱まつた、しかし此まゝ立話しも出来ないから、あの縁側へ腰でも掛けて」

「ほんたうに三浦さん貴君は、お心の氣強い、情のない方ですわねエ、わたしの胸の中を知りぬいて居ながら、わざと知らない顔で、ごまかしてばかり在らツしやるンですよ、一言ぐらゐ彼奴は今、かうだとか何とか」



「は、ア、その事か、あれかい、島田の事とかい、自分の勝手な馬鹿口ばかり饒舌ツて島田の事を言はなかつたので、不足らしく膨れるんだな、や、無理はない、無理はないがね、島田の事をいふと直ぐ、のろけたり泣いたりするから、それが蒼蠅くツて怖くツて流石の我輩、聊か言ひ出し兼て居たんだよ、情のないどころか思ひやりの情があり過ぎてね、しかし安心しろ、まだ島田ア無事な筈だ」

「三浦さん、無事な、あの人、まだ無事な筈ぐらゐですか」

「それ見ろ、すぐ泣出すから此方も弱るんだよ、泣かずに聞け、東清鐵道を長春で乗替へて満鐵を奉天の手前、虎石臺で別れたまでの事を委しく話してやらう、その後の運は天にありだ」

貴婦人といふ言葉に對して只一口に醜業婦と稱せらるゝ藝妓の鈴吉が目に持ちし涙は、こ

の無頓着なる三浦に對して、いかなる力を含みしか、おもはず髯面を反けながら、

「あらためて、いふまでもなく、あの島田は我輩と離れる事の出来ない友達だ、殆ど兄弟も同様の間で、然も内地ぢやアなし、茫漠たる天地に孤影ますく相寄るべき滿洲の空で、その島田と別れたには、別れなくてはならない深い、深い理由があつたので、今、それをね、お前に委しく話しても島田は今こゝへ直ぐ歸つて來ないんだから、情のない理窟をいふやうだが、歸つて來るまで、歸らないものと諦めろ」

もはや目に持つだけの涙では聞けぬ鈴吉、そのまゝ顔に袖押當て、泣きながら、

「三浦さん、諦めろツて、どう、どう諦めるんです、たゞ諦めるでは、わたし、諦められません、島田さんを一人、彼地へ置いて貴君だけ、どういふ理由で、お歸りなすつたんです、お歸りになればなツたで、貴君から何とか一言、いうて下すツても三浦さん、ま

ンざら罰も申りますまいに、今日わたしの見付けるまで、こんなところに隠れて在らッしやるのは、どういふ理由です、もし今日お目にかゝらなければ、此まゝ知らして下さらないンでせう」

「や、すまない、すまないがね」

「すまないのは三浦さん、そればかりと思ツて在らッしやいますの、第一この東京を立つ時だツて、わたしに知らさず、内々そツと黙ツて、いやな怖いものを遁げるやうにさ、おまけに馬關から千五百圓の爲替、朝鮮の京城から只一度、手紙が来たどけちやありませんか、わたし、お金なんか欲しくは御坐いませんよ、お手紙だツて、まア酷い事、これから滿州へ行くよ無事で居れ、その外に何が書いてありました、あれは皆、三浦さん貴君の、お指圖でせう、それに違ひありません、あの島田さん、どう考へても、さうい

ふんぢやア無いンですからね」

「おい、おい、困るな、さう妙に意地わるく搦ンで来ては困るよ、それぢやア、まるで我輩が無理に島田を連れ出して、わざと情の無い事をさしたやうだが、決して、決して、そんな理由でない、全く、あゝしなければならぬ場合だツたんだよ、さういふ理由ぢやアないよ」

「ないと仰しやツても、わたしは三浦さん、さう思ツて居ります」

「困ツた女だなア」

「困るツて、わざと貴君が困る事を、なさるンですもの」

「いカン、こりやア、いカンわい」

「何がいません」

無遠慮

「いかなよ、根柢が違つてる、出發點が間違つてる、お前は島田の事を何でも善いと思ひ込んで居て、我輩のする事を何でも悪いと極めて仕舞つてるから、いや指圖をしたの無理に連出したのと、話しが變になるんだ、島田一雄は堂々たる一個の大丈夫だぞ、いかに兄分でも我輩の無理を聞く男でない、あれは立派な國士だ」

「それやア三浦さん、わかッて居ますよ」

「わかッて居て何故、なぜ、さう愚痴ツぼく過ぎた事をいふんだ、全體お前は出來損ツてる女だ」

「おや、どう出來損ツて居ります」

「出來損ひ、此女め、大出來損ひだ、考へて見ろ、今時の藝妓で、さう一生懸命になつて、さう馬鹿正直に脳目も觸らず、さう一人の男に惚れるといふ事があるかい、藝妓らしく、

口端で巧く相手を欺して、戀も絲瓜もなく金さへ取りやア宜いんだ、それを、ま何といふ見苦しい惚れやうだい、島田の事になると直ぐ目も鼻もなくなつて仕舞つて、めちやくだぞ、おまけに此女、めちやくの不足を我輩に持つて來やがる、はムムム」

何事にも最後の結局に向ふ三浦安一、島田に對する鈴吉の戀を一攔みに取ツて退けて、ぬツと例の髯面を突出しながら、

「わかッてる話ぢやないか、いくら泣いても島田ア今こゝへ直ぐ歸ツて來ないし、いくら我輩に不足を持込んでも過ぎた事は仕方がない、だからね、黙ツて、おとなしく待つてろ」  
「待つてといへば、待つても居ますが三浦さん、何故この東京を立つ前、島田さんの口から、わたしの得心するやうに、いはして下さらなかつたんです、貴君だツて今日お目にかゝつたればこそ、さう仰ツしやるんでせう、どうしたツて、やはり貴君へ愚痴を滾すより

外に不足の持ツて行くところはありませんよ、仕方がないといへば、それまでですが、それぢやア鈴吉、あんまり人が善過ぎて、かはいさうですワ、馬鹿は馬鹿ながらも立つ瀬が無いぢやアありませんか」

「ない、ないがね、立つ瀬がないから横になれともいへずさ、鬼も角も過ぎた事は過ぎた事として諦める、島田の不任中は我輩も不運と諦めて、をりく愚痴も不足も聞いてやるし、また彼奴が歸ツて來たらね、今度こそ、いやといふほど夜も書も間斷なく、のべつ幕なしに獅嚙付かせてやるよ、その時に凹垂れないやう今の内、うんと養生して置く方が宜いぢやないか、全體まア何處が善くツて、さう彼奴に惚込んだかなア、惚れるのは其方の勝手だが、も少し手加減して惚れるもんだよ」

「三浦さん、わたし、冗談ではありませんよ、それを貴君ア、すぐ茶かして仕舞ツて、ご

まかさうとなさるんだもの、考へて御覽なさい、うそに惚れるは三浦さんお座敷の事で、ほんたうに惚れた以上、手加減なにか出來ますかね、じれツたい」

「さう怒ツて、じれるなよ」

「じれずに居れますかね」

「落着け、氣を静めて落着け、我輩が附いてる、安心しろ」

「まア三浦さんといふ方は」

「どうなんだ」

「どうも、かうも、全く捕へどころのない瓢箪鯨、呆れて物が言へなくなりますワ、我輩が附いてる安心しろ、よく、そんな事が今更お口から出ますね、貴君が附いて在らしツて、かうなツたんぢやアありませんか、あの島田さん一人なら、まさかね、かう薄情にも、

なるまいと思ひますよ」

「然り、その通り、何とでも勝手に思へ、どうせ島田の歸るまで、この我輩を恨むやうに出来てる女だ、はゝゝゝゝゝゝわるい役廻りを引受けたわい」

「役廻りが悪いモンですか、大體お人が悪いんです」

「よし、いよゝゝ我輩を悪者にしたな、ぢやア出さずに置から、實は植重が飛込で来て、お前の名を聞くと共に我輩、滿洲から預ツて歸つた島田の寫眞を懷中へ、はゝゝゝゝこりやア島田と別れる時、わざゝゝ撮らした寫眞だぜ」

「あら、三浦さん」

「こらッ、見苦しい、なぜ這ひ出すんだよ、はッはッはッ」

三浦要一、懷中より取出せし島田一雄の寫眞を手に放さず、わざと膝の上に置いて鈴吉に

向ひ、髯面の微笑を浮べながら、

「お前も知る通り、いやお前が一番よく知ツてる筈だ、あの島田ア大の寫眞嫌ひで、いくら勸めても、これまで一枚だツて撮つた事はない、それが我輩と今度の滿洲で別れる時、自分から進んで撮影したのを二枚、無論一枚は、をりゝゝ面を見てくださいといふ我輩への心算だが、あとの一枚、こりやア誰に遣ツてくれといふ考へだらうね」

「三浦さん、貴君といふ人は何故、さう、わたしを、お宥めなさるんです、誰に遣ツて宜いか貴君、考へて下さい」

「まづ我輩の考へでは」

「まア御大層です事」

「十中の八九、お前だらうと思ツてるがね、たしかに鈴吉へ渡してくれとも聞かなかつた

ぜ」

手に取上げて、今更の如く頻りに首肯しながら、

「全く島田ア好い男だ、しかし世間の俗うけに騒がれる色男と違つて、いはゆる男性美を

遺憾なく備へた好丈夫だ、しつかりした面だよ、これで根性骨まで、しつかりしてるか

らなア、我輩も女だつたら惚れるね、内地へ歸つても面白くないとか何とかいふ工合か

ら、鴨綠江へでも飛込で抱合心中したかも知れない、流す筏の鴨綠江といふ唄は忽ち

流す浮名の鴨綠江とでも變るだらう、はゝゝゝ」

髯面をあげて笑ひし油断に、ちよいと手早く奪らんとすれば、

「こら待て、さうすると破れる、待てよ、痛い」

首尾よく奪ひ取りし鈴吉、見直しもせず、其まゝ胸帯の間に挿込めば、じろく我手の甲

を打眺めし三浦の苦笑ひ、

「なるほど女の武器は爪だ、素人でないから不斷に心得て見苦しく爪なんか伸して居い筈

だが、いざといふ場合は不思議の作用で直ぐ、とんがらかつて出るんだな、それ見ろ、こ

んなに引ッ搔いたぞ、びりくする」

「御免下さいとは申しませんよ、お顔を引ッ搔かないだけ、まだ御遠慮いたしたんです」

「さうかい」

「さうかいぢやありませんよ、一生懸命の相手に御冗談ばかりなさるからです、これだツ

て始めから素直に出して下されば宜いものを、さんざ人を窘めぬいてさ、此お寫眞は三浦

浦さん、どう考へても、そんな筈の方では御坐いますまい、わたしに對して」

「此お寫眞、はゝゝゝもし我輩の寫眞なら、おの字を附けず、糞の字を附けるだらう、この

糞寫真とね、

加之も最後の一言、

わたしに對してと來たね、

は、は、は、いや全く、

お前に

對して島田その寫眞の裏へ何か書いてるぞ、ちよいと出して見ろ」

「それには及びません、歸つてから、ゆつくりと、しみく見直しますからね」

「は、ア、取返されると思つてるな、疑ひ深い女だ」

「よほど疑ひ深くして置いて貴君には、好い加減ですもの、うかくすれば、どんな目に

逢はされるか知れませんわ」

「は、は、は、わざく、親切に滿洲から持つて歸つて、

疑はれたり引ツ搔かれたり、これから

先また蒼蠅く遣つて來て、のろけたり泣いたりするんだらう、島田め厄介なものを殺し

て往つたよ、だが仕方がない、わるい事は一切この三浦が引受けるからね、もう好い加減に歸れよ」

「歸りますとも、居れば居るほど貴君もね、お蒼蠅いでせう、また此方も」

「さう有難くないといふんだらうが、その代り今夜その寫眞を抱いて寝りやア久しぶりで

氣も休まるよ、は、は、は、いつまで愚痴を滾しても同じこつた」

「全くですワ、いくら一生懸命になつても、相手は貴君ですからねエ」

「いちく、文句の多い女だが、それまで不足を並べりやア澤山だらう」

「どうしまして、これと思つた半分も並べませんが、今日は鬼も角お暇いたしませう、其

うち近々また伺ひますから、お堪は、どちらですの」

「お堪、は、は、は、お堪は、つい近くだがね、お宅といふほどの住居でないから當分まア來

る事は止せよ」

「迎も貴君には叶ひませんワ、ちよいと斬込んでも、すぐ返り討になるんですもの、ほ、

ほゝ

「いくら人を喰ひ馴れた藝妓稼業でも、我輩と太刀打、そりやア無理だよ」

「もう降参いたしますから三浦さん、ほんたうに何處で御坐います」

「いや實際ね、來ても坐る場所のないくらゐだ、もし用があれば、こゝへ來るが宜い、すぐ知らしてくるから」

「では、さう願ひませう。時に三浦さん貴君は何が、お嗜で在らっしゃいましたかねエ」

「はゝア、口では不足をいふもシの心の底では嬉しくツて何か、うまい物を持つて來るんだな」

「御飯の時は鰻、あまり召上りませんが御酒の時は、あツさりしたもの、おや、失禮、これは島田さんでしたねエ、ほゝゝゝ」

「や、此女め、歸りがけの際どいところで遣ツたな、はゝゝゝ冗談は置いて、あまり心配するな、氣を大きく持つて居れ」

「はい、有難う御坐います」

「吹けば飛ぶやうな奴なら自由に吸ひ寄せる事も出来るがね、あれほどの男を持つて、それほどの苦勞、當然だ」

鈴吉の立去る後姿を葉越に見送りし三浦要一、縁端の柱に背を持たせて兩腕を組みし前へ植重の薄笑ひ、

「大變お話しが混入ツてるやうですから遠慮いたして居りましたが、三浦さん、ありやア貴君のでは御坐いませんな」

「さうだよ、あれは友達の戀女だ」



「それなら、それと始め、さう聞けば、あゝ眞面目になつて貴君の恍惚を受けるンぢやア  
なかつたんですよ、はゝゝゝしかし出来た女ですネエ、歸りがけに臺所へ這入つて来て、  
無理やりに貴君、嗚アへ、却つて氣の毒ですよ」

「そんな事ア、どうでも宜いが、この後また、をりく来るだらうから、邪魔でも寄せて  
やつてくれ、藝妓はして居ても、さう卑しくない女だ」

わざと中間を二日置いて、ぶらりと入り来りし岡本千鶴、何とやら心に咎めしか植込の途  
中より青葉越に伸上りて、

「老爺、居るかね」

慌て、出迎へし植重に、おや若様と先を越されず、まづ此方より微笑を浮べながら、

「今日は時間が無いから、さう緩々ともして居られないが、どうだい、例の舞さん、あれ  
から来たかね」

「入らツしやいますとも、あれから毎日、キツと二度か三度は、しかし面白い氣輕な方で  
御坐いますよ、罪のない冗談ばかり仰ツしやいましたね、へゝゝゝお迎ひ申してまゐり  
ませうか」

「いや、待て、それよりもね、お前の世話で隣の三疊へ入れた野田といふ書生、まだ其ま  
ま居るかい、もし行き場所が無ければ、どうかしてやらうと思つて、第一あの舞さんと  
隣り合つて居ては、かはいさうだよ、あんまり人間が違ひ過ぎてゐるからな、はゝゝゝ」

「あの書生、實は昨日、いよゝ／＼出まして御坐います、三浦さんの、おかげで」

「おかげで出た、どうして」

「手前も全くのところ、横綱に取ッ付いた禪荷ぎのやうで、たゞ玩弄具にされてるもんだとばかり思ッて居りましたに、あゝいふ方は實際また別で御坐いますね、若様からの百圓を、そツくり其まゝ本人へ持たせた上、いろ／＼と御親切に仰しやいましたね」

「はゝア、なるほど、道理で百圓、この百圓は立派に遣ひ道があると云ツたよ、なるほどね、三萬の川に一萬は役に立たないが百圓は充分、役に立ツたんだ、流石に豪いところがあるよ、わづか百圓、實は變に思ッて居た、あの人としては」

「甚だ失禮な事を伺ひますが、あの方は全體、どうして、お暮しの費用が出るんで御坐いますせう、無論あゝして在らッしやれば、さう入りも致しまゝまいが」

「さア、そこだ、そこになると人間が大きく深く出來てるだけに猶更、さツぱり分らないね、自炊してゐる點から考へると、金のない事は知れきツてるがね、食ツたり着たりする

事のため人に助けを乞ふ筈はなし、つまり現在の境遇に應じて何等かの意味に離伏すべき期間の用意は必ず、あるんだらう、あゝいふ大膽な人物は却ツて細心なもんだよ」  
「で御坐いますせうな」

「口では馬鹿な事を言ツたり、ふざけたりして居ても、心の中は案外 眞面目だからね」

「その案外に付きまして今朝、あの三浦さんへ一人の藝妓が、たづねてまゐりましてね」

「藝妓が尋ねて來た、それは面白い、どんな藝妓だ、幾歳ぐらゐだ、何といふ名だ、こり

やア好い事を聞いた、わざと知らない顔をして居て、だしぬけに凹ましてやらう、はゝはゝ」

「ところが、いけません無効です、現在この手前が若様、その心算で、さんざ斬込んだ筈が反對で、やはり返り討になツて仕舞ひましたよ、はゝゝゝどうしても、あの方には叶

ひませんね」

今日は約束の來客あるため、ゆる／＼して居れぬといひながら、案外ゆる／＼と腰を落付けて、植重ばかりの話し相手に何とやら物足らぬ顔色。

「大變に咽喉が乾く、茶を一ばい、くれないか」

これが華族の一粒種として常意即妙の智慧、乃公の來る時、必ず茶を出す筈の彼しげ子はといふ催促に、植重それと心得て、

「生憎、鼻アは深川へ用達に出まして、土いちりの若いものでも恐れ入りますし、しげ子は今、つい今、そこに居りました筈ですが」

「なアに誰でも宜いが、まア茶は後にして、時に其、しげ子だ、いよくあれを、さうしてやらうと思ツて實は昨日、女優に關係の深い人へ頼んで置いたよ、無論、あれなら大

丈夫だが、一度は本人を連れて行かないと、つまり實物を見せないと困るが、それに付いて、あのまゝではね」

ポケットより用意の一包を取り出し、植重の前に軽く突出しながら、

「これで、何とか着る物を、三百圓あれば差當り、どうにかなるだらう、さう奢ツて着飾る必要もないがね、やはり初對面の印象といふもので、初めて見た目の感じが宜くないと損だよ、あれで一二年、うんと仕込めば、きつと、なれるに極ツてる、それまでの間、此方も出来るだけの事はしてやるから植重、お前も影で及ぶだけの力を盡してやれよ、あゝいふ輪廓の際立ツた明るい容貌はね、最も女優たるに適してるんだ、第一あの濁らずに冴えてる聲が天分だよ、その外、總ての調子を考へるに、思ツたよりは彼、サツと勝れたものになるかも知れないぜ、どんな名女優とならないにも限らない」

さやうで御坐いますかともいへず、どんな名女優よりも第一その前どんな事に相成りますかともいへず、聊か挨拶に困りし植重、きよろしくと見廻せば、しげ子の歸り來りし姿、ちらと葉越に認めて、

「只今、あれへ歸つてまゐりました、兎も角も若様、ぢきく本人へ、さぞ喜ぶで御坐いませう」

しげ子は猶更目早く、例の豊なる肉體美の小腰を屈めながら、其まゝ臺所へ行かんとするを植重は片手に招いて、

「ちよいと、こゝへ、恐れ入るぢやないか今お前さんの事で、わざわざお越になつたんだよ」

「わざわざ來ないよ、はゝゝゝ」

入らざる言譯に横に向いて、俄に煙草の煙を吹出せば、伏目勝の赤らむ顔に若々しき濃艶を増して束髪の額際ますます白く、ふつくりとせる兩手の甲の指の根に、ポツ／＼と雨垂の如き小さき肉の窪みを見せて、いかにも恥しげに差俯きし風情、つまり美人といふよりは此しげ子は俗にいふ男殺しの本性を備へたり、

華族の一粒種に生れし岡本貞雄が女優といふ問題を介して高橋しげ子に對する戀、藝妓家業に酸いも甘いも知りぬいて今年二十六となれる鈴吉が三浦の髯を介して遠く隔たりし島田一雄への戀、これを殆ど隔日の青葉越に持込まるゝ植重は、おもはず腕組んで微笑を浮かべながら、いつそ土いぢりを止して待合にならうかとの洒落、

けふも三日目の鈴吉、わざと素人風の野暮に作れど、何處やらに垢ぬけのせし姿、手みや

げを提げて入り来りしが植重の影を見るや否、流石に人馴れし氣輕さ、顔にも言葉にも溢るる愛敬、

「過日は親方、とんだ御迷惑をかけながら、また今日お邪魔に出ましたよ、ほーほー、嘸お蒼蠅いでせうが」

「どう致しまして、その節は嗅アに、有難う御坐います」

「あら、まア何ですぬエ、あんな失禮な事をして、おかみさん、お氣になさいませんでしたか、今日はお子さんに甘いものを持ッて来ましたの」

「いけませんよ、さう重ね〜ぢやア」

「どうせ親方は左の方ですから、今度目はね、どツかでお暇な時に一盃、さしあげたいと思ッて居ますの、おかみさんに叱られないやう、ちよいと身體をお借り申してね、ほー

ほーほー」

「じよ、冗談な、ほーほー、三浦さん、早速お呼びして来ませうか」

「いへ、今日はね、親方、こちらへ呼んで戴くよりは、だしぬけの不意討に、わたしの方から押寄せて往ッて、さんざ突められた過日の敵を取りたいんですの、ほーほー、御面倒でも三浦さんの在らッしやるところへ、何處ですの、この近くでせう」

「はー、案内するなアお易いコツですが、あんまり廣くもなし、さう綺麗でもないんですから、やはりね、お迎ひ申して来ませうよ、幾何お馴染でも、あれぢやア少々」

「なアに親方、そんな事を氣にするやうな世間並の人ですかね、裸體で居ても威張りぬいて洒落飛ばすのが三浦さんのお株になッてるんですから」

「ですが第一、ゆツくり坐ッて話しも出来ませんぜ、おまけに、すぐ寝轉んで大の字にな

る方でせう、あの身體で、僅か四疊半ですからね、のみならず後で、こら植重、よけいな事をする奴だ、なぜ連れて来たと言はれちやア困りますよ」

「ちやア親方、教へて下さい、どの邊で、どういふ家だとね」

「同じこつてすよ、案内しても教へても、はゝゝゝ」

「大丈夫、親方、冗談は兎に角、本氣になつて人を怒る方ぢやありませんよ、あんな怖い顔をして居て心の底に優しい、さつぱりとした意氣な通に出来るんですからね、實は親方、わたし、たゞ遊びに来たんではないんです、あの三浦さんには是非お願い申して、しみくお話しする事があるんです、後生ですから連れて行つて下さい、後で御迷惑なにか掛けるモンですか、ほゝゝゝ」

仕方なしに伴ひ行きし植重は二三軒の此方より指さして、あの駄菓子屋ですと教へしまゝ

急いで立去れば、鈴吉、その店頭を差覗いて小腰を屈め、

「ちよいと伺ひますが、三浦さんと仰ツしやる方」

店と奥とは目と鼻との間、すぐに聞えて婆の言葉も待たず、隔ての破れ障子を引開けし髯面、

「やア来たね」

「三浦さん、上ツても宜しいの」

「上るなと言ツても上るだらう」

「お婆さん、御免下さいよ」

輕き會釋を残して、其まゝ四疊半に入れば、無頓着の三浦も中央には居れず、聊か胡座の居坐を漕いで片寄せながら、

「植重を口説いて無理に案内さしたな、此女」

「さうぢやありませんよ、門口を通ると、貴君の匂ひがしましたから」

「鼻の利く筈だ、猫だからね、はゝゝゝ」

「あら、酷い事、世間體の家業は猫でも、貴君の前では立派な奥さんですよ、島田夫人」

「こら」

「こらでも何でも、わたし今日は其の覺悟で來ましたの、三浦さん、うか／＼粗末に猫扱ひななか、なさると承知しませんよ」

「はゝア、さんざ宥めてヤツた過日の敵討に來たんだな、よほど口惜しかつたと見えるね」

「どういふもんか三浦さん、貴君のお顔を見ると、つい眞面目になれませんの、やはり貴

君の方に冗談氣があるから、それが自然と此方へ移るンですな、ほゝゝゝ」

「なか／＼遣るわい、一晩でも島田の寫眞を抱いて寝たから急に氣が強くなつたんだな、この様子ぢやア本物が歸つて來た時の勢ひ、當るべからずだ、はゝゝゝとところで今日は何しに來たい、わざ／＼こゝへ來なくツても宜いに、しかし鈴吉、どうだ、三浦要一としては、いかにも洒落れた住居だらう」

「あんまり洒落過ぎて居ますよ、いくら何でも三浦さん、も少し洒落氣のないところに在らツしやれば宜いものを、わざと、こんな、わたし、どツか小ざツぱりといた便利な、お二階か、お座敷を捜しませうか、失禮ですが召上るものななか、御自分でなさらずとも濟むぢやありませんか」

「まツぱら、御免を蒙らう、お前の世話で寝たり食ツたりして見る、それこそ因果を含め

て切れた今までの色女が一時に騒ぎ出して蒼蠅いよ、我輩の生命、女を捨てたところにあるんだ」

「まあ、すう／＼しい御挨拶です事、折角の親切を無にして貴君そんな憎らしい事を仰しやると、わたしの方でも憎まれ口をきゝますよ、誰が貴君に毎日、わざわざ召上るもの運びますかね、密は島田さんに供へた影膳の、を運ぶ考へですの、ほ／＼三浦さん冗談は置いて全く、わたし影膳を据ゑて居ますのよ」

流石の三浦も此一言には戯れず、靜かに目を閉ぢて背面を首肯かせながら、「さうか、さうかい」

古障子の破れ目より往來の見え透く駄菓子屋の四疊半を借りて、自炊の土鍋飯を食ふ人間としては、あまりに不似合なる三浦の背面を、しみ／＼と今更に打眺めし鈴吉、おもはず

眉を擧めながら、

「全體まア三浦さん、どうして貴君、こんなところに在らッしやるんです、失禮な事をいふやうですが、幾何お困りになツたツて、まさか御自分一人の身體を何とか始末の出来な一方ぢやアなし、立派なお友達も澤山、おありでせうに、わたし、不思議でなりませんよ」

三浦は満面に微笑を浮べて、自己の四疊半を見廻しながら、「何が不思議だ、すぐ分るぢやアないか、答は單純に金がないからだよ、は／＼／＼」

「お金がないツて貴君、そりやア人に依りけりで、三浦さんの無いのは世間の無いのと違ツて、土鍋の御飯まで炊いて召上るには及びますまい、一軒お持ちになるのが面倒なら、どツかの旅宿で手を叩いて好きなものを取寄せるぐらゐは、貴君として何でもない藝ぢやアありませんか、もし蒼蠅さければ、東京を離れて函根なり熱海なり、どこにでも靜



かな居心地の宜い場所はありますし」

「は、は、は、わるい事を教へる女だ、金がなくって、さうしろといふのは、つまり喰遁げしろといふんだね」

「あら、とんでもな」

「だつて、さうなるよ、今この境遇の我輩に向ひ、貴君として何でもない藝といふのは宿賃を踏倒して喰遁げするのは平氣な筈の三浦さん、どうして不思議に持前の横着も出さず、かうして在らツしやるといふ事になるぢやアないか、は、は、は、」

鈴吉、頻りに小首を傾けて暫しの無言、

「どうした、急に何か考へ出したね」

「いくら考へても、全く三浦さん貴君は、どこに急所があるのか、さつぱり分らない方です

よ、無論お前なんかに分つて堪るもんかと仰しやるでせうが」

「そろ／＼また皮肉に遣り出したな」

「皮肉ではありませんが、實はね三浦さん、こんなところに、かうして在らツしやる貴君の皮肉、たしかに何か理由のある事と思ひましたから、その理由を聞けば自然、兄弟同様になさる島田さんの事が分るだらうと、あらためて三浦さん、お聞き申しますが、なぜ異體同心とかいふ貴君だけはお歸りになつて、あの人だけ彼地へ残つたんですの」

「や、此奴め、敵本主義で来たんだな、我輩の事なんか、どうでも宜いが島田の事を聞きたいため、わざと親切らしく、手を叩いて好きなものを取寄せろの函根か熱海へ行けのと、けしからんぞ」

「けしかつても、からなくつても三浦さん、その理由を聞かして下さい、あの島田さん一

人を滿洲へ残して來た理由を聞かして下さい、わたし今日は、それを聞くまで、こゝを動きませんよ二日でも三日でも貴君の傍に喰ッ付いて居ますよ」

「ありがたいな」

「冗談ぢやありませんよ、今日こそは鈴吉が本氣です、お氣に觸るかも知れませんが三浦さん、志とか仕事とかいふ上は兎も角、戀の上では、わたしの島田一雄ですよ、さう貴君ばかりの自由にはさしませんよ、あけても暮れても男相手に飽きた藝妓家業の中から、たツた一人、よりぬいて打込んだ男ですからね」

三浦要一、ばかりと横手を拍ツて、

「えらい、お前といふ女の總ては其の一言で充分だ、遺憾なく痛快に發揮し得たぞ、わたしの島田一雄ですよ貴君ばかりの自由にさしませんとは面白い、よく言ツた、さう聞け

ば我輩また安心して本氣に話す事がある」

俄にを潜めて、

「も少し、近く寄れよ」

ふざけても戯れても關際に踏止まりて我本領を失はぬ三浦要一、この鈴吉を島田に對する戀の女として、いかなる程度までを許し、いかなる祕密を打明せしか、いつにない俄の眞面目に聲を潜めて、何をか語りし後、

「さツと大略、さういふ理由で別れたんだからね、實は急に歸れないし島田たるもの、また本人の性格として、たゞ空しく徒らに歸るべき男でなし、ことし一年は是非、どうしても彼地に居らないと今までの事が總ての意義をなさない、つまり畫龍點睛といふ大切などところだから、ちツと堪忍して待ツてろ、金を儲けて氣樂に暮すことを人間の能事と

心得たものゝ目には、いはゆる縁の下の力持で、人の知らない世間に隠れた馬鹿苦勞する好奇心な奴とも見えるがね、そこに我々の最も面白い愉快あると共に最も深い大きい誇りがあるんだよ、こゝを鈴吉、よく頭腦の中へ入れて置け、お前を世間普通の女とすれば、我輩、決して打明さないこつたぞ、宜いか、わかッたな」

鈴吉、おもはず目に涙を浮かべながら首肯して、

「わかりました、よく分りましたが三浦さん、外の事とは違ひ、それに猶更、あゝいふところですから、もし萬一の事、ありはしますまいか」

「ない、ない心算だ、よし多少の危険はあるにしろ、島田は、元來の圓轉滑脱たる中に驚くべき用意周到の緻密で、ありやア他人の危険程度では何等の危ツ氣もない男だ、安心しろ」

「全く安心が出来ますかねエ」

「出来ないとして、どうするんだ」

「どうするツて、わたし、どうも出来ないから、貴君を頼りに、いろくお聞き申すんぢやアありませんか」

「お聞き申された事は現在、今いふ通りだ、この上は我輩お前に對して、惚れたが因果といふ諺で叱るより外なしだ、何故お前は其日々々の風次第で嘘を家業とする藝妓の身で居ながら島田のやうなりに打込んだ、何故、さう本氣で惚れたんだい此奴、お前が悪いのだ、自業自得だ、もし安心が出来ず、心配で苦勞で堪らなきやア諦めて仕舞へ、もし諦める事が嫌なら辛抱して待ツてろ、えらい、先刻お前を豪いと言ツた詞は取消すぞ」

「三浦さん、では後生ですから、わたしに手紙だけ出さして下さい、満洲の何處、何とい

ふところへ宛て、出せば島田さんの手に這入るンですか、いづれ貴君とは内々、いろ／＼と打合せをする場所が極ツてるンでせう」

三浦要一、どたりと胡坐の身を後へ倒して大の字となり、髯面の兩眼を閉ぢながら、

「困ツた女だ、手紙を出すぐらゐの事は何でもないがね、その手紙を今、島田に見せてやりたくないよ、あれも情の人間だ」

更に身を起して再び胡坐を組直しながら、

「島田の身體は飛ぶ鳥のやうで一定の場所なく、どこに居るか分らないがね、をり／＼翼を收めて休むところがある、そこへ手紙を出して置けば本人の手へ這入る筈になツてるから、さう堪らなければ手紙だけ届けてやらう、だが手紙は我輩が一應讀んだ上だぞ」

「あら、まア喧ましいンですね、わたしが島田さんへ出す手紙、そんなに難かしく怪しま

れて、いち／＼お取調べを受けるンですか、三浦さん、よく新聞なんかで見ますが、信書の秘密といふのは全體、どんな事ですの」

「少々膨れたね、は／＼、いくら膨れても怒ツても我輩の目を通さない手紙は、出してやらない」

「なぜ、何故です」

「何故の意味は其方にある、お前は世間普通の女が男に惚れたと違ツて、のろけ加減が頗る調子外れの猛烈で、殆ど半狂氣の程度に來てるからね、どうせ長たらしい、つまらない餘計な愚痴を滾したり泣言を書いたりするに極ツてる、それを今、あゝいふ場合の島田に見せたくないンだよ、御機嫌よろしう御無事にお歸りを待ちます位ぢやア逆も承知すま

」

「さう貴君、さう窮屈に縛られてまで、わたし手紙を出したくありませんから、いッそ三浦さん、もう止しますワ」

「えらい、また豪いぞ」

「馬鹿にばかり、されますねエ」

「いや、全く、豪いよ、こゝで手紙を出さずに止すのは、止すに止されぬところを止すんだから豪いに違ひない、遠く離れて空うち眺め月が鏡になるならば、といふ唄があつたね、あれだよ、あの心意氣が寧ろ今お前としての情緒纏綿、何ともいへない工合で、なつかしいやうな、うれしいやうな、じれツたいやうな、つまり戀は離れて居るほど情が増して宜いぢやアないか」

「いゝか、わるいか、知りませんよ」

「さう、ぶり／＼するな、どうだい、かうしようか、實は近日、我輩も出さうと思つてゐる時だから、その返事の中へ島田よりお前へ何とか別に一筆、優しく書いて来いとね、寫眞は既に渡したし、その上に島田からの手紙が来れば、さう駄々ツ兒のやうに騒がなくなつても宜からう」

「誰が駄々ツ兒のやうに騒いで居ます」

「いや、さう、あせらなくツても宜からう」

「あせらずに居れますか」

「御免下さ」

「三浦さん、また伺ひます、わたし今日は何をしに来たんでせう、大體の生來、ぼツとしてゐる人間ですが島田さんに別れてから猶更、念入の、ぼんやりになりました事ね、かは

いさうに無理もない、これほど惚れたンですもの、島田さんの事をいふ時は三浦さん、わたしの顔、どうかなツて居ませんか、よくまア溶けずに目鼻が付いてると我ながら不思議ですワ、ほゝゝゝ

「はゝゝゝ、自分の思ふ通りにならないから、くそやけに此女、のろけ出したな、面白く出来てる女だ、はゝゝゝ、」

「面白く今日は嘘、お慰みになりましたらうね、御祝儀も頂かないで、とんだお座敷を勤めました事」

「おい、祝儀の代りに店の駄菓子、すきなものを持ツて行け、但し金十錢也を止りとして」

「有難う、いづれ近々また改めて伺ひます」

「よほど改めて伺ツてくれ、いつも同じ島田の事で手放しの素のろけを受けちやア堪らな

5」

青き生垣の外を通る鈴吉の白き顔、ちらりと目に入りし植重、門口に出でゝ待受け、

「今お歸りですか」

「親方、先刻は有難う」

「どうでした三浦さん、植重め、よけいな事をする奴だと仰しやツたでせう」

「なアに親方、お前が無理に口説いて案内さしたンだらう、はゝゝゝと例の調子でね、そんな事を氣にする人ぢやありませんよ」

「さツぱりした方ですからねエ」

無遠慮

「ところが親方、しんみりと今日お話しする心算で眞面目に考へて往つた、わたしの相談まで張合のない、さっぱりした方になられて仕舞つて、つまりませんでしたワ、いくら此方は一生懸命になつても、自分の氣に入らないと萬事あの通り露骨の無愛敬と来て、おまけに相手を茶かす事の至つて上手な名人ですからね、これまで随分お世話になつた事もあります。今日といふ今日は、わたし全く、腹が立つて、口惜しくつて、歸りがけには親方、すまないと思ひながらも自暴半分に、さんざ、すきな熱を吐いて來ましたよ、ほゝゝゝ」

「ぢやア流石の三浦さん少しは、何とか」

「それで何とか、少しぐらゐ怒つて貰へば、まだ却て此方に話し工合もあり取付く島もありますがね、やはり平氣なもんですの、はゝゝゝと笑つてね、どうだい店に賣つてる駄

菓子でも食はないかは、よく出來てるぢやアありませんか」

「なるほど、よく出來過ぎてますなア」

「實は親方、さう出來過ぎられては困るんですよ、いろ／＼と、いふにいはれない理由が  
ありましてね」

「兎も角まア、お這入りなさい、こゝで立話しも變ですから」

「いえ、もう退くなりなますから、ゆつくりして居れないんですが、どうでせう親方、あの三浦さんを一度、引ツ張り出して下さいませんか」

「いけませんよ、わつしななか、どうしたつて、身分が違ひますし、第一お心易く願つては居りますが、まだ昨今お馴染になつたばかりですからね」

「ところが親方、どういふもんかといへば失禮ですが大變、親方が氣に入つてるらしいン

ですよ、ありやア罪がなくって面白い男だとね、ですから親方が何とか巧く誘ひ出せば、わたし等が頼むよりも手軽く出るに極つてますよ」

「全體、何處へです」

「どこつて、どツか静かな料理屋へね、あれで親方、御酒を召上ると、まるで小兒のやうになる方なんですからね、そこで、わたし、取つて押へる工夫があるんですよ」

「それちやア三浦さんを欺して、わつしが一番の悪者になるぢやアありませんか、後が困りますよ後が」

「大丈夫、後で親方の迷惑になつたり困るやうな拙い事はしませんよ、や、遣られたわい、はッはッはッが幕切になる人ですからね、かまひませんワ、わたし後を引受けますよ、親方、たとひ地獄の釜の底に落ちてでも落ちた以上、泣言をいふやうな三浦さんでない

ンですもの、わたしの事ぐらゐ、笑つて済むに極つてますよ」

軒並びに繁華の市中とは違ひ、生垣の奥深き夜の十時過ぎ、ひツそりとして、猶更ら若き女の寢盛りを幸ひ、まだ横にもならぬ植重夫婦は聲を潜めながら、

「ねエ、おい、若様、いよく本氣に乗出して来たが、これから先、どうなるか、考へて見ると、ちよいと心配だな、うまく本人が女優になり遂げてくれりやア宜いが、もし途中で變てこな眞似でもされると困るぜ、第一この乃公が申譯の立たない男になるからね」

「お前さん今更、そんな事を心配したつて仕様がなによ、どうせ此まゝ此處で女優になるンぢやアなし、過日お話しのおつた通り、どツか女優になれる所へ、若様がお世話なさ



るんだらうから、つまり餘所で出来る事まで手の届く筈がないよ、どう間違つても、いはゞ本人の勝手さ」

「さういへば、さうだがね、さう本人の勝手にして置けない事があるよ、同じ間違つてくれるなら外で間違はずに、やはり順當の筋道通り若様へ間違つてくれないと困るんだ」

「お前さん、をかした事を、物の間違ひに順當の筋道通りといふ事があるかね、全體お前さんの間違ひといふのは、何だい」

「何だつて、野暮だな此女、分つてるぢやアないか、乃公の手から若様の世話になつて女優にならうといふ娘だらう、それが途中で萬一、もし外の男でも出来ちやア大變だといふ事さ」

「ほゝゝゝまアお前さん」

「笑ひごつちやアないよ、女といふもの、さう大して美くなくつても世間に騒がれる女もあるもんで、あの娘なにかア現在それだよ、何處となく愛敬があつて男好のする質に出来るからね、まして磨きの利く化粧立のする顔で、女優にならうといふ派手な家業で自然と多くの人に近づくんだもの、中には油斷のならない素早い女喰の奴があつて、どう巧く手に入れないにも限らない、ところで若様は表立つて其奴等と一緒にされる御身分ぢやアなし、さんざ人の知らない影で力を盡しながら、ひよつくり蔭に油揚のやうにでもなつて見ろ、いゝ年をして申譯のない間ぬけ野郎が一人こゝに出来るぢやアないか、かう考へて来ると三浦さん、あの方ア豪いよ、女優になる前、まづ何とかして岡本に喰つ付けて仕舞へ、はゝゝゝと来たからなア」

「大丈夫、お前さん大丈夫だよ」

「どうして、何が大丈夫だ」

「お前さん、それこそ餘計な心配だよ、もう、ちやんと出来てるからね」

「えッ、出来てるウ、いつの間に何處で出来たい」

「出来てるツて、まだ二人、どうなツたといふンでもなし、そんな隙も場所もないがね、實は過日、たしかに出来るといふ證據を見届けて置いたよ、ほムムムお前さんや、わたし等の昔と違ツて今の若い人は案外、ぐづくして居ないよ、華族様だツて何だツて、第一あの娘は年の割合に氣の走ツた如才のない伶俐で絶えず自分の行末を考へてるからね、さう悪い料簡も深い企みも無からうが、こんなになツて來て、あの若様を遁しツこないよ、ほムムム」

植重は眉を擧めて額越に鼻アの顔を見ながら、

「たしかに出来る證據を見届けたツて全體、どんな證據があるンだい、この話の持ち上ツて以來、乃公も随分、いろ／＼と氣を付けてるがね」

「お前さんと、わたしとは、氣の付けどころが違ツてるよ、お前さんは只、あの通り用もなに近頃、頻りと入らツしやる若様の方ばかりを考へてるから、折角お力を入れた甲斐もなく、もし女優になる途中で人に取られちやア濟まないといふ心配をするンだらうが、わたしは、わたしで、また一方の素振ばかりに氣を付けてるから、こりやア確かに間違ひなく出来るモンと思ツてるよ」

「な、なるほど、女ア女だ、ところで、どういふ證據を握ツたね」

「實は此方で握るよりも先に、向ふで握ツて仕舞ツたよ」

「向ふで握ツたとは」

「若様の手と、あの娘の手と、もう握ったり握られたりしてるんだよ、始め若様を見た時は妙齡の娘だもの、惚れるの何のといふ事は無くツても、ぼつと顔を赤くするのは普通だがね、入らツしやる毎に漸次その赤さが濃くなつて来て、第一また身體の運びやうまで違つて来たからね、わたし、はゝアと思つてるところへ、本人の望み通り女優になれ女優にして遣らうといふ、お言葉があつて御覽な、たとひ片目でも跛でも華族様といふ金色の光りが放つてるし、おまけに此方は死んでも國へ歸りたくないといふ身體だもの、うれしくツて有難くツて夢中に取り纏るワね、加之も若様の男振が男振で、すつきりと上品に優しいもんだから堪らないさ、こりやアお前さん出来ない心配どころかね、どんな垣をしたツて出来る筈になつてるんだよ」

「ちやア手を握るにしても全體、どツちから手を出したらうな」

「わからない人だね、今いふ通りの始末だもの、女の方からに極ツてるよ、植込の間で二三度も、わたし見届けて置いたからね」

「そりやア、乃公なんかも、やはり女の方で、お前から堪られた事は覚えてるがね」

「ふざけなさんな、冗談ちやアない」

「はゝゝゝ冗談は措いて、いよ／＼さうとなれば、安心は安心だが、また一事、ちよいと心配があるよ、お屋敷の方だ、失禮な申分だが若奥様は半狂氣のやうな、ヒステリーの酷いのと來てるからね、無論それだから、かういふ事になるんだが、もし知れると大變だぜ、さしづめ植重の出入お差止めと來る、困ツたなア、今更ら一方の娘を隠して、お止し遊ばせといふ譯にも行かずさ」

「これに限ツた事かね、いつまでも始めは黙ツてるの引ツ込んでるのといふ勢ひで、すぐ

行詰ツて困ツたは年中お前さんのお株ぢやアないか、わたし知らないよ」

「知らない、知らなきやア知らないでも宜い、手前なんか相談するもんか、近來はね、三浦の大將が付いてるよ、あの髯さんに委細うち明けて、どう致しませうといへば、例の調子で、よし我輩が引受けたと來るに極ツてる、若様だツて、あの我輩様には、よほど一目を置いて在らツしやるからね」

岡本貞雄といふ一個の若き紳士が喜んで娶りし妻でなく、華族の岡本家といふ一種の階級上より殆ど強制的に迎へさせられ、加之も其夫人は元來の神經質に骨と皮の如く瘦せて、をり／＼發作的に強度のヒステリーを起し、これに對する良人としては絶間なき不愉快の極、猶更ら滾るゝ愛敬に豊艶なる肉體美の高橋しげを聯想すれば、ます／＼堪らず隙を窺ひ身を脱け出して、また今日も植重の門口へ、

折しも生垣に添うて歩み來る三浦要一、岡本の姿を見るや否、片手をあげて、

「やア岡本君、ちよいと待ツた」

其まゝ入口に立停りて待てば、のそり／＼と微笑を浮べし例の髯面を近づけ、

「なか／＼近頃は植重通ひに精が出ますな、はゝゝだが無意味な宴會なんかへ義理往生の行列に出されたり、くだらない奴と應接所で暇を潰すよりか、遙に氣が利いてる、植重通ひ結構、頗る宜しい」

岡本貞雄は胸板を突かれし心地、餘儀なく苦笑ひに迎へて、

「この老爺、罪がなくツて氣輕で、面白い奴ですからね」

「老爺も面白いが、青々とした植込の華越に何か、ちらと動くものゝ見えるのも面白いでせう、冗談は措いて禮は禮だ、時に過日は有難う、お芳志は我輩、厚く感謝して居ますよ、

たゞ數の土に於て此方の用をなさないから、受けなかつたゞけの事でね、あしからず」  
「いや、折角の御依頼に、甚だ相濟まぬ事で、何分まだ部屋住ですから」

「なアに君、我輩の方が無理を頼んだので、あの事は一切、打切としてね、もう互の頭腦から取ツて仕舞はう、その代り君、こゝで喰す毎に必ず何か奢る事に極めてほしいもんだ、近所の料理屋から美味しいものを五人分づゝね、つまり君と我輩と植重夫婦と、また外に一人、誰か居る筈だ、はゝゝゝゝゝゝ」

こゝまで押詰められて、今更ら卑怯に逃げられもせず、また無言のままの立往生も出来ず、苦しき横を向きながら、

「困る、はゝゝゝゝさういふらされては迷惑だ、困りますよ」

「どう見られて困るか我輩、さツぱり分らん」

「ますゝ困る、あれの事でせう」

「あれとは」

「しげ子とかいふ」

「とかいふにあらず、正に高橋しげ子」

「はゝゝゝあれはね、始め、何だか悪い奴の手に落ちかゝつたところを幸ひ、植重の老爺に救はれて、當分こゝで厄介になつてるもんださうですが、本人の東京へ來た目的は、女優になりたいとかで」

「とか續けた、はゝゝゝしかし女優、よからう、ありやア君、いかにも總ての上と感じの好い、はツきりとした鮮明な輪廓を持つてるから、たしかに女優たるの素質を完備してるよ、それを君が後援して遣らうといふ譯だらう、賛成、大賛成、但し賛成料に君、今日

は何を奢るね、はゝゝゝ」

呼止められたといふよりは、寧ろ捕へられし岡本貞雄、加之も高橋しげ子の事を冗談半分に窘められて、ますく苦しませの遁げ腰、

「立ツて居ても仕方がない、兎も角も這入りませう、こゝの番茶でも呑んで、ゆるく」

「なるほど、番茶も出端、あれは君、たしか十八だらう」

「十七か十八か知らないが三浦さん、よほど何か恨みがありますね、はゝゝゝ」

「大あり、大に君、あるよ、かうなれば白状するが、實は我輩あの娘に對して聊か、野心といふほどの不埒な考へも持たないが、また路傍の花とも見捨てる事の出来ない程度に於て、憎からず思ツて居たところ、何ぞ圖らん我輩よりも一足お先へ君といふ人があツて見れば、もう無効だ、逆も叶はない、男振の點は無論、境遇財産の點は猶更ら以て、

加之も出陣の出後れと來てるからね、殆ど競争にも問題にもならないが只こゝに一事、君に勝つべき點は我輩いまだ獨身だよ、しかし獨身を誇るは此方の事で、お向ふ様は我輩の獨身よりも君の獨身たらざるを承知の上で、かまひません好いワといふかも知れないぢやアないか、きツと彼女、さう吐すに極ツてる、のみならず三十七の今日まで喚アも持てないで、まご／＼してるやうな男は、何か人の知らない疵があるに相違ない、どうせ三浦の髯め、ろくな奴でないと言はれちやア我輩、目も當てられないよ、はツはツはツ」

この調子で饒舌りまくられては堪らずと、無言のまゝ逃げ込まんとなれば、また人聲に呼止めて、植込の途中まで追ひ來り、  
「さう君、慌てゝ顔を見たいかね」

さらに一段の辭を張り上げて、

「おい、あの娘や、早く出ないか、すきな人が来たぞ」

行くに行かれず戻るに戻れず、びたりと岡本貞雄を立往生さして置いて、満面の微笑を浮べながら、

「怒ッては君、いカンよ、これで我輩は君のため戀路の速力を強めて遣るんだ、ぐづくしてゐる事があるかい、目ざす敵は眼前にあり、戦國の昔に兜武者を祖先に持つて其血を享けた君ぢやアないか、早く組伏せて打取れよ、岡本家の御曹子、はゝゝゝとところで君その間、ちよいと借りるよ、この横に待つてる自動車、あいてるだらう、二時間ばかり、いくら諦めた我輩だッて君、あれと君と段々に近寄る工合を馬鹿な面して見ちやア居れない、幸ひ近來、友達の情婦で藝妓の面白い女があるからね、そいつを乗せて二時間ば

かり市中を駆け廻ッて来る、せめてもの腹癒せだ、はゝゝゝ」

帽子も被らず常着のままの素裕に岡本貞雄の自動車を驅りて、向島より柳橋への眞一文字、折しもお約束の宴會に立出でんとする鈴吉の盛粧を結句の幸ひ、

「おい、大變だ、急に島田が歸ッて來た、途中からの電報で今、東京驛へ迎ひに行くんだ、一緒に乗れ一緒に、さア早く」

「あらッ、ほんたうですか」

「嘘と思やア止める、あとで悔むな」

「まア三浦さん待ッて下さい、どうか御一緒に」

「ぢやア早く〜」

「この通り出の衣裳ですから、ちよいと着替へる間」

「いけない、もう時間が無いぞ、貧乏人の我輩が自動車を飛ばすくらゐだ、其まゝで前へ  
「だつて、あんまり」

「あんまりも、あまらないも誰に遠慮するんだ、さア早く乗れ、お前はブラットホームへ  
這入らずと驛外に居てね、この車中で待つてろ、島田に對する善意の伏兵で、思はず互  
に見合す顔と顔、ちよいと乙な不意打を喰はしてやるんだ、はゝゝゝさア早く、早く乗  
れよ」

ぼつと上氣せて、煙に巻かれし鈴吉の手を取り、其まゝ引すり込で馳せ出しながら、

「かうして、お前と合乗に並んでる我輩の姿を人が見たら、何と思ふだらうな」

「何と思つても、宜いぢやありませんか」

「我輩は宜いどころか寧ろ愉快だがね、お前の方が聊か氣の毒だ」

「どう見たつて世間の勝手ですよ」

「ぢやア勝手に見させて置かう、時に幾何か、持つてるかい」

「お金、入るんですか」

「金といふほどの事でもないが、何に入るか分らないよ、まさか文なしではね」

「ほんの、お小遣だけ這入つてませうよ」

「どのくらゐ」

「それなら何故それと仰しやらないの、お座敷ですもの、ヤツと二十圓、あるか無しです  
よ」

「なアに大丈夫、それだけあれば食へる、どこへ這入らう、どこが美味いだらう」

「何ですよ三浦さん、たべる事ばかり、ほゝゝゝうんと後で奢りますよ、わたしの奢れる



だけ精いッばい」

「後より先に奢ッてほしいな」

「先へッて貴君、島田さんが著くんぢやありませんか、もう時間が無いと仰しやッて」

「はゝゝゝ困ッたなア、こゝまで巧く遣ッたが、さア困ッたぞ」

「なぜ、どうしてぞす」

「どうも、かうも全く困ッた、もし島田の歸るのが嘘だッたら、定めし怒るだらうな」

「おや、三浦さん」

「實はね、さう目を剝出すなよ、實はね」

「三浦さん、貴君、わたしを欺したンですな、冗談も冗談、ふざけるにも程度のある、よくまア貴君、こゝまで念入に、こんな罪の深い嘘が、吐けましたね、よろしい、いくら

お心易いにしろ、かう御丁寧な欺され方で、馬鹿にされたり玩弄具にされたり、もう澤山です、覺えて在らッしやい、今時の伶俐な藝妓は洒落た事と笑ッて、すましもしませうが、わたしのやうな野暮な古風な融通の利かない智慧のない藝妓は、根が馬鹿で一途ですからね、何をするか知れませんよ」

「たゝ助け船ッ」

「まア貴君といふ人は、まア」

「呆れた奴だね」

「全體この自働車、どこで借りて來たンです、素寒貧のくせに、この代まで、わたしに拂はさうと言ふンでせう」

「や、それだけは安心してくれ、これはね、我輩と違ッて岡本といふ金持華族のンだよ、

白札ぢやアない黒札だ、いくら乗廻しても構はないから、どうだい、喧嘩しながら東京中を駆け歩かうか、その代り實際、島田のところへ、すきな手紙を届けてやる。どんな手紙、厳しい、惚けを書いても我輩これを改めずに封じ込んで出すよ」

「もう三浦さん、お世話になりませンワ」

「さう怒るなよ、お前の手紙を見れば島田の奴、病氣でも直ぐ癒るぜ」

「この間は、わたしの手紙、島田さんの爲にならないで今日は、病氣も癒るンですな、調法です事」

「そこは我輩の添へる手紙に書き工合があつてね、毒薬また時に却つて名薬にも使へるさ、思ふ存分に氣兼ねなく、惚けて宜いよ」

「じれつたい、わたしを貴君どうするンですよ」

「痛い、たゝゝゝ」

運轉手、おもはず振返りて、お静に願ひますとも得いはず、

「どちらへ、おいでになります」

三浦は髯面の苦笑ひ、

「どこでも宜い、的なした、なるべく廣い平な道を二三時間ぐるぐる廻つてくれ」

二時間の約束にて乗り出せし自動車、外の人でない三浦の事、遅いか早いか、いづれ三十分や一時間ぐらゐの相違あるべしと思ひしに三時間、四時間、果は夜に入りても歸らず、あの髯面に冗談半分の横槍を入れらるゝよりは二時間の邪魔拂ひ、結句の僥倖とせし岡本貞雄も幾度か時計を出して今更の肩を擧めながら、

「困ツたねエ、こりや困ツた」

何の效なくとも、じつとして居られず、二三度も向島の土堤まで斥候に出でし植重、猶更ら首を傾けながら、

「これまで、どういふ方と御交際になつてるか、さつぱり分りませんから、お尋ねする心當りも御坐いませんし」

「随分、いろんな知合を澤山に持つてる人だがね、其後の三四年は殆ど不通らしい、乃公も現在こゝで不意に出逢つたくらゐだから、まさか、あのまゝの風で突然、久しぶりの人を訪ねて行きもしまいよ」

「では、やはり例の調子で、ぐる／＼運動半分に的もなく、どツか駆け廻つて在らツしやるんでせうが、お一人で用も無いし話し相手も無いし、全體まア何が面白いんで御坐いませう、よほど變つた方ですれエ」

「や、うツかりして居たよ、近來あの三浦を尋ねて來た藝妓があるだらう、友達の関係してる女とかで、それを乗せると言つたよ、はゝゝゝその藝妓、何處か、知らないかも」

「さ、それが若様、たゞ鈴吉といふ名ばかり承知いたして居りまして、どこの藝妓か」

「いよ／＼困ツたねエ、實は四時に歸ると屋敷のものへ言ひ置いて出たんだからね、もう六時過だ、仕舞ツたよ今日は自動車を止せば宜かつた、おまけに七時頃、約束した客も來る筈で」

「さう貴君、三浦さんに仰ツしやれば宜しう御坐いましたに」

「だが別に用のある人ぢやアなし、それが、ちよいと二時間ばかり借りるといふんだから、寧ろ早く歸ると思つて居たよ」

「今にも、歸ッて下さると、よう御坐いますがねエ」

「なアに考へて見ると、あんな人だからね、わざと遅れて困らさうといふのかも知れな  
し」

障子越に小耳を立てし高橋しげ子、まだ家外は暮れきらぬ夕暮の電燈に猶更ら白く冴えたる顔、植重の背後を盾に半ば現はして、

「甚だ、失禮で御坐いますが、兎も角お屋敷の方へ、どツかのお電話で、何とか」

振り返りし岡本貞雄、おもはずボンの膝を叩いて、にこりと笑み、

「むゝさうだ、氣が付かなかつたよ、この邊に何處か電話のある家は無いかね、何とか掛けて置けば宜い、さうだ、さうだ、それに限る、はゝゝゝゝ」

桑の用筆筒、紫檀の小机、半ば開ける押入の中に金庫、籠編の手函に幾冊の帳簿と算盤、これを左右として坐せる六十あまりの大老爺、でツぷりと肥りし目鏡越の赤ら顔、闕際に手を支へし十五六の小僧を振り返りて、

「何だい、何の用だ」

「お客様が、三浦さんといふ方で」

「三浦、はてな、どんな人だ」

「あまり、おみなりは立派で御坐いませんですが、まッ黒に髯の生えた大きな方で、帽子も被らず、しかし自動車で」

「も一度、聞いて見ろ、三浦、何といふ御名前ですと」  
其まゝ立ちし小僧、また再び入り來りて、

「逢へば分る、三浦要一だと」

「や、その三浦さんか、久しぶりだ、兎も角こゝへ通すが宜い、珍らしい人が来た」

三度目の小僧に導かれて、のそりと現はれし三浦要一、満面に微笑を含みながら、主人の勧めし座蒲團の上に悠然と身を置いて、

「やア暫く、その後は御無沙汰しましたが、ますく御盛で」

「手前こそ、さやう彼是、もう四年になりますな、大變お顔が生えまして、途中お見受け申しては、ちよいと分りませんよ、いつ頃お歸りになりました」

「なるほど、足かけ五年だ、實は今年の春、ひよつくり歸つて来て、ぶらくして居ますかね、あれ以來、殆ど内地の世間とは没交渉で、まだ何處へも顔を出さない、つまり面髯の生えたぐらゐが變つたので、その他は相變らず依然たる風來坊の三浦要一、は、

は、とところが今日、この邊を通つて、ふと思ひ出したでは濟まないが、幸ひ、老いて益々壯なる田川さんの元氣な顔を急に見たくなつてね、どういふもんか我輩この頃は若い女の綺麗な顔を見るよりは、段々と年を取るに随ひ猶更ら元氣旺盛に精力を増して來る人の膏ぎつた顔を見るのが愉快になつて來た、それには田川さんなんか、全く注文通り出來てる老雄だからね、今年、幾歳になられる」

「は、う、恐れ入りますな三浦さん、さう煽られちやア、は、う、もう無効ですよ、もういけません、いくら強情を張つても、ことし六並びですからね」

「ふ、う、六十六、しかし田川さんの六十六は一年づつ六十六度づつ單に重ねて來たといふ敷の上だけで、をりく、新聞で見る活躍振は、なか、どうして、頭腦も身體も實に若いもんだ、全體この相場師なんかは敵中にあるが如く、一日の油断も出來ない家業

で、世間普通の人よりも日夜の精魂を擦り潰すためか寧ろ早く弱って、どかりと年を取るものゝ多い中で逆に段々と元氣を出す田川さんは全くの別物だ、つまり金を金と思はず人を人とも思はない圖太い根性が發達しきって、遺憾なく横着の修行が出来て仕舞ったからですな、はゝゝゝ」

田川の老爺、おもはず赤ら顔に一種異様の苦笑ひを呈して、

「どうも、三浦さんとしては始め、ふしぎに昔と違つた鹽梅で、お世辭が善過ぎると思つて居ましたが、やはり例の三浦さんだ、はゝゝゝ圖太い根性の發達と横著の修行は少々、酷い、さんざ煽つて置いて一氣に叩かれたやうなもんだ、相場も三浦さん、さう自由に巧くドデンが利くと面白いんですがねエ、實は近頃、大曲りですよ、はゝゝゝ」

三浦要一、ますゝ〜毎面の微笑を浮べたがら、

「久しく御無沙汰して居て突然、妙な事を聞きますがね、米に拘はらず株に拘はらず、全體、相場といふものは田川さん、面白いですか、誰もいふ紋切形の挨拶は我輩これまで度々、いろんな人に聞いたが、その道の大手筋、つまり屍山血河の中を縦横無盡に馳せ廻つて来た千軍萬馬の古兵、いはゆる田川將軍が六十六の今日に得たる一言は、どんなものか、承はりたくつてね、それで来たんですよ」

田川老人、聊か反身の腕を組みながら苦笑ひの皺を寄せ、

「困りますな三浦さん、これが初心な素人で聞きつ嚙りの慾から相場を遣りたいといふ人なら文句なしの頭ごなしに押へ付けてお止しなさい、止すに限ると意見もするし、また年が年中この道に出入して居る地場の奴で一時、ガツたとか曲ツたとか青くなつてる者には、それ相應の講釋も出来ませんがね、定石を心得て居て手を下さないと同じで、大體に相場の

事を知ツて居て相場をしない、貴君のやうな人には、お話しどころか反對に此方が承は  
 りたいくらゐだ、はゝゝゝからかつては困りますよ三浦さん、ちよいと通り掛りの洒落  
 半分に久しぶりで田川の老爺を窘めてやらうなんて、さうでせう、それに極ツてる、はゝ  
 はゝ昔から貴君ア随分お人が悪く出来て居ますぜ、眞面目な顔をして在らシツて御冗談  
 に念の這入る方だから、うツかり大抵な奴はして遣られますよ、恐ろしい世の中で、とん  
 だ華族様があつたもんですネエ、はゝゝゝとところで只今、どちらに、お乗物の工合では  
 常分お兄様の方にでも」

三浦要一、俄に天井を仰いで、わざと歎息の體、

「全くね、二番生にしろ、とんだ華族が出来て仕舞ツたよ、たまゝ五年振の自動車で來  
 れば、お乗物の工合お兄様の御厄介ですかと斷定される、はゝゝゝところが田川さん、其

お兄様も實は貧乏公卿の家だからね、己むを得ない急用の時に聊か世間への體裁を加味  
 して俄かのタクシーが關の山、餘儀なく自分だけの抱へ車夫はあるが實際の經濟状態は、  
 テク／＼歩くテクシーの方が相當だよ、はツはツはツ」

「や、恐れ入りますな三浦さん、さういはれて田川の老爺、かはいさうに、どう御挨拶を  
 申上げて宜いんです、ます／＼恐縮するぢやアありませんか、だから貴君ア人を窘める  
 事がお上手だといふんですよ」

「おツと、どツこい、その術に乗らんよ田川さん、うか／＼すると直ぐ横町へ引ツ張り込  
 まれる、やはり絶えず敵に接して居る相場師のくせだね、はゝゝゝ」

「まるで三浦さん、これぢやアお互ひに隙を覘ひ合ツて、話しするやうですな」

「いかにも、その通り、實は我輩、煮ても焼いても食へないといふ世間の評判に高い田川老

人の油断を窺ひ隙を覘つて、三萬圓の金を奪ひ取りに來たんだ」

襖の影より女中の汲み出せし煎茶を手に取上げて、無雑作の一旦に飲み乾しながら、ますく髯面に微笑を浮べし三浦安一、

「田川さん、わざわざ考へて來たのでなく、この邊を通り掛りに、ふと思ひ出して、加之も五年ぶりで訪問した我輩が、だしぬけに三萬圓を借りたいの貸せのといふ事は、あまりの突飛な亂暴で、いかに荒ツぽく金を扱ふ相場師としても、道に落ちてるものを拾つた身代ぢやアなし、よろしいと出してくれる筈はありますまい、實際また出すべき理も理由もないんですからねエ、はゝゝゝ」

相手のいふべき事を一言も餘さず、すツかり其まゝ自己の口より曝け出して置いて、聊か膝を進めながら、

「ところで我輩、知らるゝ通り米にも株にも恐らく自分が手を下して相場といふものを遣つた事はないが、今日この世の中に種々雑多の職業中、別に一個の相場師といふ人間のある事に頗る深い興味を持つて多少の研究した事もあるから、幸ひ其道の老巧者たる田川さんの前で一度、思ふ存分に遠慮なく相場師なるものゝ心理状態を饒舌ツて見たい、無論お世辭のいへる我輩でないから、無禮な言は吐くかも知れないが、どうです、これを聞くだけの雅量、否、今、其お暇がありますかね」

頭は禿げて年を取れど元氣は若くして世に後れず、流石に投機界の名物と唄はれたる老爺、おもはず一種の面白味を以て迎へ、

「や、面白い、と申しては失禮ですが、謹んで、承はりませう、御承知の通り不斷この我々の接近するものは、人間の大きい小さい金の多い少い差別はあつても、つまり同じ



型のものばかりで、顔さへ見れば絶えず其の日の賣買に關する同じ相場上の談話ばかりです。から、いや社會の經濟が、どうの、いや海外の影響が、かうのと近來は頻りに新しい口も聞きますがね、やはり馬は馬、牛は牛連れで相場師ですよ、はゝゝゝこの相場師を貴君のやうな方が利害に關せず高いところから見下した其お言葉は、我々に取つての名藥です、ありがたく服しませう」

「なアに實は名藥でなく、大變な毒藥かも知れないが、凡そ今日の社會に最も智慧を要しながら最も馬鹿げた結果に向ひ、最も勘定を知つて居ながら最も勘定知らずに無駄骨を折る商賣は我輩、いはゆる相場師なるものだと考へる、蓋しといへば少々四角張つて來るが田川さん、素丁稚トりの若い時から大將々々といはれる六十六の現在まで日夜間斷なく血眼に働いて、加之も殆ど前後にない名人と稱せられ大手と稱せられ、彼奴は白足

蟲と同じで轉んだ事がないとまでに稱せらるゝ田川さんの財産は今、失敬だが全體、どれほどありますね、幾何ありますね、米と株を兩手に張つて多年の一舉手一投足を世間に喧傳される田川老將軍の身體、どうしても天下富豪の十指内に數へられなければ引合ひますまい、千萬圓以下では逆も勘定が足りません、もし萬一、百萬圓臺とすれば田川の間ぬけ老爺、大馬鹿ものゝ骨頂だ、はッはッはッ」

田川老人だしぬけの旋風に吹飛ばされたるが如き顔色、目を剝いたまゝの無言に三浦は疊みかけて、冷かなる微笑を呈しながら、

「さうぢやありませんか田川さん、さのみ世間に騒がれず靜に黙つて居て水の窪みに吸ひ取るが如く金を拵へる奴もあり、また同じ儲けるにしても社會に響められ相手に喜ばれながら富を作るものゝある世の中で、あけても暮れても遣つた取つた賣つた買つたと年

が年中、殆ど血眼の喧嘩腰で勝敗を争ひ、加之も其道の大將と仰がれ大立物と稱せられ第一人者といはるゝ人が萬一、もし百萬圓題の財産とすれば、天下これほど馬鹿げたる事なく、まぬけの骨頂、たはけの行止り、どう考へても富に對する手法の下手糞で一文も遁さず刻々の勘定は知ツて居ても人間生涯の總勘定を知らない、これは甚だ無禮な比較だが、金を盗んで半へ這入ツてる奴、あれに一人として差引勘定の合ツてるものはない、取ツた金高を監獄一日の苦役に割當て、幾何になるか、三年なり五年なり人生の自由を奪はれながら牢の内働くだけの半分、いま三分の一、それを世間で働けば白日青天の下に立派な良民として妻子安樂に暮せる筈を、ふしぎに僅かな金で引ツ縛られて闇いところへ行く奴の多いと同じ結果で、恐らく世の中に相場師ほど割の悪い商賣はない、相場をして割が好いと思ふのは、正直の汗水を垂らして食ひ兼ねる人間を横目で見

ながら、たま／＼握り拳を振廻して運よく一擲萬金の例があつたり、また握り拳でないものが其例を重ねてトン／＼拍子に膨れ出す事があるからで、しかしトン／＼拍子を巧く仕上げて膨れ出した絶頂を固く保つといふ事は、相場師として相場に没頭する限り到底、出来ないコツて、由來この相場師なるもの、辭書に成功といふ文字はあるまいと考へる、いや斷定する、もし相場師に成功ともいふべきものありとすればそりやア相場の成功でなく、うまく儲けた時に心機一轉するか或は餘儀なき事情のため外の商賣へ移るか、乃至また病氣その他不幸で身體が再び役に立たなくなつた時に残ツた金の數をいふので、それ以外に於て相場師は相場を止められるものでない、彼等も實は多少その邊を承知してると見えて、をり／＼相場を休むのが相場の秘訣だといふぢやありませんか、をり／＼休むといふ點まで氣が付いて居て、生涯これを止めるといふ事に氣の付かないのが

呵しい、は、は、は、つまり怒のために囚はれてるんだ、もし囚はれるといふ言葉を除いて、聊か善意に解釋すれば、たゞ面白くツて堪らないといふ趣味にあるんだらう、いはゞ刑事が犯罪者を追ひ廻して捕縛すると一般、あの給料であの手當で、あの危険を冒して、あの苦心慘憺たる働きは到底普通の考へで出来ない筈だが其處に一種、いふべからざる愉快が伴つてると同じ理窟で、のみならず相場師といふものは目から鼻へ抜けるやうな機敏さで居ながら案外、相場以外の事は、ぼんやりとした智慧の足らないもので、驚くほど世間知らずに出て来る、無論、日夜間斷なく全身の力を一方に集中するから無理のない點もあるが、決して人間の努力奮闘に値するだけの結果を得るものではない、ましてや相場師に限つて子供を多く産まないといふほどに激しく頭脳を使つて金を目的としながら、天下の富豪これより出でざるは實に割の悪い苦勞だ、は、は、は、しかし相場師を監獄の盜賊

に譬へたり刑事巡査の苦心慘澹に比較するなんて我輩、あまりに禮を失したから、あらためて國家經濟の自然調節に於ける必要上より相場師なるものゝ、最も誇るべき善いところを饒舌ツて見ませうか、どうですぬ田川さん」

眞正面より嚙んで吐き出すが如くに扱はれて、流石の田川老人も呆れ返りし顔色、

「もう澤山です」

「いや、聞いて居られる田川さんの方は、もう澤山でせうが我輩の方は、まだ十分一も饒舌り足りませぬね」

「三浦さん、あれだけで貴君まだ足りませぬか、随分これまで種々な人に扱して、さまざまの場合、いろんな議論や批評も聞きましたが、まづ今日ほど手厳しく剥き出しにコキ卸された事はありませんね、は、は、は、しかし何處までも三浦さんだ、一點お世辭のないと

「ここに感服しましたよ」

「お世辭のないのは萬事露骨に出來た我輩の性分で、さう感服して貰はなくても宜しいが今まで饒舌つた我輩の意見は、どうですか、つまり相場師に對する我輩の觀察、間違つて居ませうかね、今度は田川さんのコキ卸す番だ、はゝゝゝ」

「いや、全く貴君のいはれる通りで、ぎくりと胸に徹へる事がありますよ、いかにも現在この相場師ほど苦勞の多い割に差引勘定の馬鹿げたものはない、結局、大きいやうで小さいのみならず、おまけに世間からは人の難儀を喜んだり、悪い事でもするやうに思はれて居ましてね、こんな勘定に合はない、つまらない家業はありませんよ、さんざ骨を折つた上に損をすれば好い氣味だと笑はれ、たま〜儲けると忽ち四方八方から睨まれて、さも太い事を働いた奴と同じに思はれるんですからなア、大相場の喰合で一牛懸命に

なる時は三浦さん實際、夜も寝ずに目が血走つて、きたない話ですが小便の色まで變りますぜ、これと等しいのは喧ましい本場所の取組で互に難かしい敵を控へた相撲の方にもあるさうですが、ありやア春秋二期の顔合せで唄の通り、一年を二十日で暮らす好い男、我々は鼻唄どころか青息吐息で年が年中の休みツこなした、よくまア生命の續くもんだと、我ながら不思議に思つて居ますよ」

「はゝゝゝ面白いな」

「何が面白いもんですか」

「いや、面白いのは我輩で、それほど面白くないと承知して居ながら止められないといふ相場師の心理状態、ます〜我輩に面白くてならないが、どうです田川さん、殆ど忘れられて居た筈の人間この三浦が久しぶりで突然、だしぬけの不意に飛び込んできて、か

ういふ事を聞くのは、つまり自分の運命に何等かの變換すべき時節到来、その動機を與へられたものと思つて田川さん、幸ひ失敗でもない今こゝで斷然、相場界を退く氣はありませんかね」

「さア、實は人に言はれずとも三四度、これまでの間に止めたいと思つた事もありますかね、やはり周囲の關係上、どうしても急には」

「周囲の關係を斷つのが即ち止めるので、その外に止めようはないでせう、止める氣ばかりでなく止める勇氣を出して實行しなければ無効だ、また仕かけた相場場の損は損で立派に損とした上、此方へ取るべき利益は其まゝ捨てるだけの雅量さへあれば、いつ何時でも平氣に止められる筈だ、もし我輩の意見を容れて、いよく止めるとなりやア田川さん、その退き祝ひとして先刻ちよいと口を交らした三萬圓この三浦に貸して下さい、吝な藝

妓でも止める時は、それ相應に退き祝ひといふものがある、まして多年の世間を騒がした天下の大相場師だ、しかし止めないといへば鑊一文も借りない、さんざ饒舌た饒舌り料は下手な浪花節の一段に及ばないとして一笑に付しますよ、はゝゝゝ止める止めないは其方の勝手だが、どうです田川さん、わづか三萬圓の退き祝ひを三浦要一の大なる必要に與へて斷然こゝに相場界を去るか、乃至また六十六の今日以後なほ朝暮盛衰の巷に没頭して、失禮ながら幾何もない餘命を損益の定まらざる金のために縮めるか、どつちになさるね、相場も止めるが三萬圓を貸す事も止めるといへば、そりやア田川さん、あまり洒落過ぎてゐる、はゝゝゝ」

日は暮れて夜の八時過、ぶうくと鳴る自動車の音に待ち兼ねし植重、飛び出して見れば、

果して三浦の聲、急かす慌てず例の如く、のそり／＼と降り來りて、

「やア大變に遅くなつたよ、もし早く歸る筈だつたがね、岡本どうしてる、二時間の約束で出たから、あまり好い顔もして居なからう、尤もだ、はゝゝゝ」

「尤もぢやありませんぜ三浦さん、實は今日お屋敷の方へ必ず四時に歸ると、さう仰しやつたんださうです、それが貴君もう七時過、かれこれ八時ですもの、全體、何處へ往らしつたんです」

「何處といふ的はないよ、たゞ運動する氣で、ぶら／＼、いや、ぐる／＼市中を驅け廻つたのさ」

「よくまア、あれから今までのなしに廻りましたね」

「いくら我輩だつて、のべつ幕なしに走り續けて居れないから、ちよい／＼と途中で息ぬ

きに休んだよ、まづ第一に近頃來る藝妓の鈴吉ね、あれを柳橋から欺して乗せたところが、忽ち露現して、ぐづ／＼吐すのが蒼蠅いので追下した後、築地に居る或知合の老爺を不意に襲ひ込で、凡そ一時間餘りも饒舌たらうが行く先々で早かつたり遅かつたり時刻が悪いため、夕飯を食ひ損つて腹ぺこだ、無論、始めに鈴吉を乗せた時、如才なく幾何か取つてやらうと思つたが、彼女ぶり／＼怒つて仕舞つてね、一文も出しやアがらない、はゝゝゝ」

「笑つて居ちやア困りますよ三浦さん、手前は宜う御坐いますが、今か／＼と首を長くして待つて在らしつた方の前で貴君、いち／＼そんな餘計な暢氣な事を委しく話されますかね、そこは何とか餘儀ない用のあつた事にして、うまく調子を合して下さらないと、變な工合になりますよ」

「さうか、なるほど」

「さうか、なるほどと今更お氣の付く貴君でも無いぢやありませんか、今日は三浦さん少々、ふざけ方に念が入り過ぎましたね」

「別に、ふざけた譯でもないが自然、かうなツたんだよ、わるく思ツてくれるな、時に岡本の相手、あの女優の卵子は、どうだツたい、我輩の遅いのが却ツて都合よく、喜んで居たらう、實は岡本だツて、さう腹の立つ筈がない」

「冗談は置いて兎も角まア早く、お這入り下さい」

「急ぎ足に入りし植重の後より、悠々と歩みし三浦は岡本貞雄の顔を見るや否、物もいはせず浴せかけて、

「すまない、とんだ迷惑をかけて何とも相濟まないが、遅くなツた理由を聞かされても仕方

なからうから我輩は只、すまないと謝して置かう、實は度々運轉手に半怒りの注意を受けて、もう若様お歸りの時刻になりますと屢々、いやな催促されながら、つい遅くなツて仕舞ツた、運轉手に對する解決は言葉よりも外に方法はあるんだが素寒貧の我輩、そこは君、よろしく頼む、あゝ働いて君に叱られちやア、かはいさうだよ、はゝゝゝ」

植重、おもはず首を振りながら、口の中で、  
「うまいもんだ、これぢやア鬼も佛も遣られるわい」

首を長くして今かくと待ち兼ねし岡本貞雄、怒るに怒れぬ相手、苦笑ひのまゝ自動中に乗らんとすれば、わざとこれを送り出せし三浦の鬚、

「全く君、今日は迷惑をかけて濟まなかつたが、考へて見ると華族も君のやうな華族振は實に不自由なもんだね。ちよいと屋敷へ歸る時間が遅くなれば直ぐ心配の種だ、夫人の

手前は勿論、召使にまで餘計な氣兼ねをして何とか嘘を吐かなければならぬし、第一、この自動車といふ甚だ手輕でない厄介な乗物があるから却つて出入に不便だよ、途中でパンクでもしたと誤魔化す外に申譯のない速力を持つた奴で、加之も空で歸せば殿様は何處だと忽ち詮議に及ばれるしね、まるで自分の身體を縛られたまゝ護送せらるゝ一種の罪人扱ひだ、はゝゝゝどうしても君、華族は我輩の如き貧乏華族の二番生に限るよ、或意味の禁治産に行はれる金もなし、餘儀なく儀式の行列に引ッ張り出される煩ひもなし」四時に歸るべき筈を夜の七時過まで待たされて、その上また好きな熱を吐かれては堪らずと、はや片脚を自動車の踏臺に掛けて軽く振り返りながら、

「いづれ、其うち」

「もう君、日は暮れて仕舞つたから同じこつた、そう慌てゝ急がなくつても宜からう、とこ

ろでね、あれを君、どうする」

「あれとは」

「あれさ、あれを君、いよく女優にし立てるかね、仕てやるなら遣るで一日も早く、さうして遣つた方が宜いね」

運轉手に聞かるとを恐れて、かけし片脚を俄に引きながら自動車より身を離せば、人に對する擒縦自在の三浦は微笑を含みて、

「女優も女優だが君、やはり我輩の事だよ、いつか君に頼んだ三萬圓、一萬圓だけ持つて来てくれた時、折角の芳志は感謝するが三分の一ちやア用に足りないとして、返したが君、あれは今でも拵へて貰へるだらうか、實は今日、君の自動車で築地の或老爺を不意に訪うて、いろく説いたところ不思議だね、これも一萬圓ならばといふんだよ、はゝ



は、つまり我輩は一口で一萬圓以上は金が出来ない人間に極ツてゐるらしい。そこで考へた、こりやア三人に頼んで三口を合せば、よからうと思ツてね、無論まだ一口の的はな  
いからね、今といふんでない、もう一人、誰かに白羽の矢を立てて見て、その上のこつた  
が、外の二口いよ、大丈夫となれば君、あの一萬圓を復活させて貰ひたい、都合三萬  
圓になれば其三萬圓を念のため一萬圓づゝの三人に見せて廻つた上、あらためて費途を  
委しく話すから、どうか君、この不眞面目なる三浦要一が其金を以て、いかに眞面目な  
仕事に投ずるかといふところを一種の興味に見物して貰ひたい」  
はや自動車の踏臺へ片脚を掛けし岡本貞雄の背後より、ちよいと待てとは言はず、あれを  
君、どうすると女優の一言に引放して、實は自己の一萬圓を否應なしに復活させ、たのむ  
と固く手を握りし横着さ加減、まるで他人の娘を一萬圓に賣付けたるが如し、

されど三浦要一といふ男、すう／＼しさに一種の愛敬を含みて卑しからず、きび／＼とせ  
る中に自然の同滑を帯びて憎からず、まッ黒の髯面を滑稽的に突き出して人を馬鹿にしな  
がら相手の感情を害せざる點は、いはゆる巧を拙に藏せるもの、いかにも人生の秘訣を得  
たるが如し、

岡本の自動車を見送りに、其まゝ駄菓子屋の四疊半に歸るかと思へば、のそ／＼また入り  
來りて植重に向ひ、

「これから歸ツても寝るばかりで仕方がない、もう一時間ばかり、ついでに邪魔しても宜  
いかね」

「よろしう御坐いますとも、どうか御ゆるりと、時に三浦さん、今日は行く先々で早かつ  
たり遅かつたりして夕御飯まだだと仰しやいましたね、いかゞでせう、何も御坐いませ

ンが、お茶漬でも召上ツては」

「や、結構、腹べこ、いかにも察しが宜い、よく氣が付く」

「は、さう貴君、恐れ入りますな、さう仰しやるほどの御馳走は逆もありませんよ、全く三浦さん、お茶漬で宜しければ」

「宜いとも、實は我輩、それがため一旦この門口を素通り仕かけたが、また引ツ返して來たんだよ、生憎く晝の時に残ツた冷飯を食ツて仕舞ツて、今夜これから炊かなければならないといふ、あはれの境涯だよ、氣樂は氣樂だがね、考へて見ると、をり／＼これで獨身は嫌になる、は、は、は」

「わざわざお獨りで在らツしやらなくても宜い御身分ぢやありませんか、それを貴君、御自分で、御勝手に」

「なアに誰が御自分で御勝手に不自由するもんかい、かはいさうに、この髯ツ面で土鍋飯を炊くのも仕方が無いからだよ、こんな時は植重、顔の裏表が分らない女でも宜いから一人、ほしいなア」

「ご、御冗談を、は、は、は」

「全くだよ、我も昔は男山で、一時あれほど生命がけに押寄せて來た女を蒼蠅く思ツて、片ツ端から無残に振り飛ばした罰が今こゝで當るんだね、金を湯水の如く費ツた奴が落魄れると急に凹垂れて、今度は湯水を金の如く大切に使はなければならぬのと同じだ、は、は、は、いくら龜末でも植重、鼻アを大事にしてやれよ、はツはツ」

駄菓子屋の店頭より障子一枚の四疊半、三浦の前に仕事着のまま坐せし植重、

「どうなさいました、けふで三日も入らツしやいませんから、もし近ごろ流行る、お風でも召したのかと思ひまして」

「なアに流行り物や風邪なかに縁のある男ぢやアないよ、實はね、ちよいと考へる事があつて、この三日ほど何處へも出なかつた」

「へエ、我々が半年の智慧を絞つて考へても及ばない事を、ひよいく出る貴君が三日も外へ出ずに此四疊半へ立籠つたとは、よほど難かしい事で御坐いませうな」

「いや、さういふもんでない、世間普通に何でもなく考へる事も我輩に取つては大變な思慮を要する時があるよ、つまり人間は世の中の居處次第で、おの／＼自分の立場が違つてゐるからね、しかし兎も角も三日間の巢籠りをして、まづ當分これで頭腦の一段落が付いた、はゝゝゝのそ／＼また邪魔に出かけるぜ」

「どうか毎日、お出でを願ひます、お世辭ぢや御坐いませんよ全く、ふしぎですね、貴君のお顔が一日見えないと何だか物足らないやうな氣が致しまして、あの植込の間から、ぬつと其お髯が出ると手前、わけもなく好い氣持になりますよ、もし三浦さん貴君が女なら早速、飛び出しますね、はゝゝゝ」

「いはゆる前世の戀路に添ひ遂げられなくつて、情死でもしたのが植木屋と我輩とに生れたのだらう、はゝゝゝ時に岡本、あれから來たかね、例の女優は、どうしてる、口では不足をいふが過日、彼奴の自動車を乗り廻してやつた時、遅くなつたを幸ひ二人の間で、たしかに何とか約束が固まつたらうと思つてる、さんざ双方で氣を揉みぬいて、もや／＼した結果だからね」

「實は三浦さん、今朝、ちよいと若様が見えまして、いよくあれを女優にするから改め

て迎ひに来るものがあると、すぐ其まゝお歸りになつた後へ、別の自動車で五十あまりの洋服を着た人が参りましてね、いつの間に用意したもんか、ちやんと寸尺も合つた立派な當世風の衣裳を、あの娘に着替へさせた上、その自動車に乗せて出て行きましたが、本人また心得たもんで少しも慌てずに済まし込んだまゝ我々夫婦へ挨拶をしたばかりか、お伺ひする筈ですがと三浦さん、貴君への御挨拶まで頼んで行きましたよ、なるほど、あの様子ぢやア總ての手筈は我々の知らない前々から、すツかり出来て居たんですね」「はゝゝゝいよく連れ出したか、いくら世間見ずの坊ッちやんでも女にかけては智慧も出るし用意周到なもんだ。しかし彼奴、我輩への挨拶まで頼んで出たところは、いかにも行届いて如才ない伶俐に出来てる、あれなら女優になれるだらう、我輩また前途に幸あれと蔭ながら祈ツてやる」

植重も實は肩の荷を卸したる心地に膝を進めて、

「兎も角まア三浦さん、これで手前も差當り樂になりましたよ、仕方なしに一時こゝへ入れた野田といふ書生も貴君のおかげで喜んで出ましたし、あの娘は若様の後盾で本人の望み通り女優になれるんですから、つまり出世の緒に有付いたやうなもんで、いそぐと連れて行かれましたがね、實は三浦さん、あの二人のため、をりく嗅アに餘計な文句をいはれましたよ、はゝゝゝですが悪い事をした氣もしません、どうなるかと思つたことが無事に済んだ心持は、草臥れて膏汗になつた身體を湯に這入つたと同じで、格別また好いもんでさア、縁あればこそ貴君、こんな老爺の世話になるんですよ」「や、さう思ツてるから人の世話も出来るんだ、どうせ亭主の男氣は嗅アの笑顔にならなものと極ツてる、はゝゝゝところで一事、相談がある、どうだね析角あの二人を厄介

拂ひして蒼蠅の事の助かつた矢先へ氣の毒だが、その後釜に我輩を入れてくれないか、いくら構はずやの暢氣もンでも、をりく往來の砂埃を障子の破れ目から吸ひ込む此の四疊半は少々、恐れ入る時もあるしね、第一また近來は土鍋飯の自炊も聊か面倒になつて来たよ、のみならず三日間の巢籠りで考へた結果、もう暫くで我輩の羽が生えるかも知れない身體になつたからね、長くて二月か三月だ、その間この三浦要一といふ男の頭を洗濯するため、あの青々とした植込の中に飼放して置いてくれないか、まさか植木の根を嚙つて枯らすやうな悪戯もしないよ」

「そゝそりやア三浦さん、全くですか三浦さん、冗談ぢやアなく全く、さうして下さいませるか」

「面白く出来てるな、さうして下さいは此方の頼むこつた、はゝゝゝのそゝ毎日あの通り

出かけて馬鹿口を聞いたり好きな熱を吐いて仕事の邪魔をするが、惜いよゝゝ厄介になるとすれば我輩、あの狼狽へた青ツぼい書生や女優の卵子なかと違つて、鼻ア殿に文句をいはせるやうな仕事はしない、客があつて目障りになれば隅ツこへ縮まる事も知つてるし、たまには運動かたぐゝ土を運んだり水を汲んだりする事も心得てる、もし夫婦喧嘩でもすりやア巧く手輕に捌いてやるよ、はゝゝゝゝゝどうだ植重、いや親方、たのみませと、萬事、かういふ調子に遣るよ」

「萬事、さういふ調子に遣られちやア、お断り申します、やはり今までのやうに、おい植重、こら老爺で遣つて下さらなくツちやアね、なアに貴君の爲めなら鼻アななか、ぐうの音も出さしませんよ、あれだつて三浦さん、わツしの方から惚れて頼んで來て貰つた女ぢやアありませんぜ、やいゝ向ふから騒いで死ぬとか牛きるとか吐した哀れさに仕

「方なく持つてやツたんですもの、もし萬一、貴君を粗末にでも仕やアがツたら畜生、その分で置きませんから三浦さん、どうか是非お出でを願ひます、失禮ですが大したお荷物もないでせうし、ちよいと手輕に提げて今すぐ、いかゞです」

思はず膝を乗り出せし植重の顔を見て、鬼でも佛でも組むべき三浦の眼中に一滴の涙、

「いかなる悪魔も、貴様を欺す事は出来まいなア」  
戀に急かるゝ男の女を誘ひ出すが如く、植重は我を忘れて膝を乗出しながら、すぐに今これからといへど、三浦は片手に押へて、

「まア、さう騒ぐない、やはり浮世の形式だ、兎も角も噂ア殿に一應は話してくれ、その上で差支ないとなれば同じこつても心持よく行けるよ」

「いやに他人めたい御丁寧ですなア、今いふ通り相談も絲瓜もありますかね、かう見えて

も一軒の主人で、主人が承知すりやア文句のねエ筈だ、善は急げで是非これから直ぐ来て戴きませう、實は噂アの前で自慢したいくらいに思つてますよ」

「かういふ厄介ものを引すり込んで自慢になるかい、あまり急ぐ善でもなからうに、はゝゝ」

「善でさアね、どこに悪い理由があるんです、考へなくつても知れたこつた」

「をりく反對で主客顛倒するから面白い、はゝゝでは折角の芳志だから今日、早速、轉がり込むとするが、やはり一言、ちよいと前觸した方が宜いね、なるべく山の神は静めて置けよ」

「よけいなこつてすが、ぢやアお氣の済むやうに、さう言つてやりませう、すぐ引ツ返して來ますから三浦さん、共お心算で」

「お心算も御用意もあるかい、鳥の塒を變へるやうなもんで身體だけの轉宅だ、はゝゝゝ」  
 植重の飛び出せし後に、今までの天地とせる我四疊半を見廻せば、和洋五六冊の書物と當座の洗濯著物二三枚の總財産、おもはず苦笑しながら、焜爐と土鍋とポール函の底に一升あまりの米の残り茶碗と箸と小皿三枚に口の缺けたる土瓶一個、これを其まゝ置去に來月分の部屋代を添へて、出がけの挨拶、

「婆さん、長らく世話になつたが、今日から植重の食客になるんだ、をりゝゝまた話して來るよ、掃除でもして出る筈だが、知つてる通りの無精もんだ、ゆるしてくれ」  
 ぶらりと立出ですが、わづか二町あまりの間を途中まで迎へに來り植重、つくづく今更に

打眺めて、

「お荷物、それだけですか」

「この外に何があるい、時に山の神、どうだツたぬ」

「どうも、かうもありませんよ、いろゝゝ願ひ申して三浦さんを今日から來て戴くから有難く思へ、もし萬一お龜末な扱ひでもすると直ぐ飛び出しなさるぞ、氣を付けろとね、すると鼻アめ涙を滾して喜んで居ました」

「嘘を吐け、こんな厄介物が來るに泣いて喜ぶ鼻アがあるもんか、亭主の道樂で仕方がないと諦めるか、時の災難とでも思ツて泣いたんだらう、はゝゝゝどうでもお前さんの勝手にしなさい、わたしや知らないよ、ぐらゐが關の山だね、しかし出かけた以上、差當り外に行きどころのない人間だ、いよゝゝ厄介になるぜ、鼻ア殿は我輩、あらためて巧く遣るよ」  
 駄菓子屋の四疊半より青々とせし植込の中へ引移りし三浦は夜の明けたる心地、片手に提げし全財産を縁端に轉がして、老爺よりも第一まづ鼻アの前に髯面の微笑を浮べながら、

「ぶら／＼毎日あの通り来る事は来ても、仕事の手を止めて邪魔をするんだと思へば何だか氣の毒だね、いくら横着な我輩でも實は落著いて居れないから好い加減に切上げて歸つたが、この廣い青々とした中から歸つて見ると薄暗い四疊半が猶更ら穴の底へ這ひ込むやうだつたよ、は／＼／＼それが幸ひ此まゝ居据りの厄介になれるとすりやア三浦安一、のび／＼として急に身體の目方が増えるかも知れない、うるさい面倒な奴が押掛けて来て嘸、迷惑だらうが宜しく頼むよ、おかみさん」

「まア貴君、とんでもない、そんな事、仰しやつては困りますよ。どうせ行届きませんに、ねエお前さん」

「さうとも、三浦さんの口から、おかみさんといはれる面に出來てるかい、こりやアね、お梅といふんですから、どうか呼捨に願ひますよ」

「は／＼ア、始めて聞いた、お梅さんといふのか」

「さんぢやアありませんよ、おの字だつて無駄だ、梅で澤山ですよ、今に梅干婆となるんですからなア」

「その代り蓄の花で匂つた時は、夢中になつて這ひ寄つたんだらう、は／＼／＼」

四十女の鼻アも思はず顔を赤くして臺所口へ逃げ出せば、其まゝ縁端に腰うちかけて髻面を傾けながら、

「いくら身體一個の我輩だつて、今まで居たところを引揚げて來たとしては、あまり荷物が手軽く勘な過ぎて何だか變に思つたが、なるほど考へて見ると忘れたものがあるわい、は／＼／＼」

「何です何を、お忘れなすつたんです」



「昔、或るところに頗る吝な奴があつてね、轉宅の時、流し下に腐りかけた芋の蒂や床の下に捨て、ある古下駄の片ツ端かり掻集めて来たが、いざ落着いて見ると何だか物足らないので、よくよく思案すると大變だ、自己の女房を忘れて来たといふ馬鹿げた談話がある、しかしこれを聞いた人のいふには、なアに女房は餘所から貰つたもんで夫婦喧嘩をすれば出て行く他人だ、それを忘れて来るに不思議はないが、どういふ譯か世の中には自分の身を忘れる奴があると笑つたさうだ、我輩まだ自分を忘れるほどでもないが、今夜から寝る蒲團を戸棚の中へ忘れて来たよ、はゝゝゝ」  
植重、例の首を振出して俄の大聲、

「おい唄ア、ちよいと来い、戸棚の中へ蒲團を忘れて来なすつた事をいふだけでも、かういふ面白い、ためになる講釋が聞けるんだ、唄アを忘れるぐらゐは不思議でねエとよ、

ぐずぐずすると叩き出すぞ、早く婆さんの所へ行つて、蒲團を取つて来い」

「おいゝ植重、さう間違つちやア困るよ、まるで話しの取りやうが違つてる」

あゝいふ人に來られては貧乏神を背負ひ込むが如く、かういふものは不味の食へぬと三度の食事にも好きな熱を吹かれ、たゞ一室の客座敷を我物として大の字に寐轉び、もし氣に入らねば大切な植木も午莠拔にせらるゝかと思の外、をりゝ來りし今までは別人の如き三浦安一に、ほつと胸を撫下せし植重の唄アは却て氣の毒顔、

今日も夫婦に笑はれながら、わざと尻をからげて髯面に古手拭の頬被り、いかに止めても聞かず、現在の境遇これが我輩の分相應ぢやと、不様な手付に腰を屈めて頻りに植込の根元を掃ける背復より、

「三浦さん」

女の聲を振返れば例の鈴吉、

「やア、また来たね」

「また来ましたか、何をして在らっしゃるの」

「こんな事をしてるよ、もう世の中が嫌になつたからね、いよく植木屋の手間取になるんだ」

「まア、よく似合ひます事、自動車に乗つたりなさるよりも、全く、その方が貴君の柄にあるやうですワ、いッそ、お髯を剃つて仕舞つたら、どうですの」

「は、は、は、此女、過日の自動車を酷く恨んでるな、欺されたと考へるから腹が立つんだ、假ひ少しの間でも戀しい島田が歸つて来たと思つて夢中に嬉しかつた心持は、有難かつた

らう、まるで目も鼻も崩れて居たぞ」

「其お禮に今日は来ましたの」

「何か持つて来たかい」

「持つてまわりました、あの時に三浦さん、お約束なすつたでせう、欺したのは悪い、その代りどんな手紙でも中を改めずに届けてやると」

「は、まア、さういふ事を言つたかなア」

「たとひ首を取られても一旦、口へ出した事を知らないといふやうな、そんな卑怯な世間並の三浦さんではない筈の貴君でせう」

「は、は、は、うまく立ごかしに來をツたわい」

「うまいも拙いもありますかね、現在、さう仰しやつたんですもの、實はね、わたし、口

惜しくツて、口惜しくツて、もう一切、貴君には何も頼まない心算で居たんですが、折角かうして久しい間のお馴染を、あれツきりちやア、いくら構はずやの貴君でも小々お氣が済むまいと考へまして今日、その手紙をもツて來ましてから、わたしの目の前で外封をして島田さんの居處を書いて下さい、わたし歸途に郵便局へ投り込みますからね」

「なか／＼皮肉に用心深いね、幸ひ我輩も用があるから一處に封じ込んで出すといへば、鼻紙にでもされるとでもいふんだらう」

「お察しの宜い事、その通りですよ」

「は／＼、ちやア仰せに従ひ書く事にしよう、仕方がない」

「何が仕方のない事がありますかね、あたりまへですワ」

「今日は悉く我輩の負け軍だ、四疊半でも城廓を構へてゐる時と違ツて、人の家へ厄介

になると自然、どことなく氣が弱くなるんだな、鶏口たるも牛後たる勿れか、は／＼」

「お仕舞の文句は何のこツてす」

「食客するとね、いやしくなツて頻りに鶏と牛が食ひたいといふこツたよ、は／＼とどうだ、奢らないか、二人で八九圓もあれば済むぜ、十圓紙幣一枚で女中の祝儀も出るだらう」

「あら、まアお高い事、ちよと手紙の上書だけで十圓も出すんですか、區役所前の代書は三浦さん小さい字を細く澤山に四枚も五枚も書いて一圓は出ませんよ、ほ／＼と失禮」

欺されて自動車に乗せられた敵だけは、今日の出會頭に首尾よく打取ツた氣の鈴吉、おもふまゝ三浦に不足を並べて後、植重への挨拶、

「親方、今日は」

藝妓といふものゝ習慣語として、顔を見れば始めの一言、いつも同じ口より何の意味もなく、只これだけの挨拶なれど、世間普通の禮儀に通用されて輕き會釋の微笑を浮べながら、

「三浦さん、いよく此方へ御厄介になつたさうですね」

「なアにわツしの方から願ツて無理に来て戴いたんですよ」

「随分ア好奇心です事、併し親方、よほど思ひ切ツて食客扱ひをなさらないと、何處までも突き貫けて我まゝを仕出すか行止りのない人ですよ、萬事を承知して居て横着を極め込むのが上手で、うツかり出来ませんからね、わたし暇のある時、をり／＼見廻りに來ませう、ほゝゝゝ」

「ぢやア、さういふ工合に頼みませうかな、はゝゝゝ」

「全くですよ親方、あゝいふ人を抑へるには氣の利いた男は却ツて無効、わたしのやうな

向ふ見ずで、分らずやで、どうかすると直ぐ喧嘩腰になる女が一番、きゝますからね、三浦さんを弱らす方法は愚痴ツぽく蒼蠅く纏ひ付くに限るんですよ、ほゝゝ時に親方、おかみさん、おいでゝすか」

「臺所に居ませう」

三浦も植重も其まゝにして、足早に臺所へ身を運びながら、

「あら、おかみさん、大變お精の出ます事ね」

「おや、入らツしやいまし」

「お忙がしい中を、お邪魔にはかり出まして、すみません、その上また三浦さんが御厄介になつたさうですね、もう御存じでせうが、わたしの久しい以前から御最辰になつて、さんざ、お世話をかけた方ですから、どうか宜しく、お願ひ申します、あの通り口では

随分、すきな事を言ツたり馬鹿な事を話したりなさいますがね、あれで居て、おかみさん、少しも心に蟠まりのない、至ツて親切な方なんですよ」

「いへ、主人からも、いはれまして、よく承知して居りますから」

「それがね、おかみさん、承知して居ても、つい人の癢に觸るやうな事を平氣で、ひよこく言出す方ですからね、どうかその邊を、あしからず、その代り一事の取得は、おかみさん、いくら此方が遠慮なしにツケく言ツても、また平氣ですからね、つまり考へやうで、どツちかといへば、うツちやツて於て少しも手数のかゝらない人ですよ、ほゝほゝ」

植重の鼻アには我身の親兄弟を頼むが如くに言葉を盡しながら、本人の三浦に向うては殆んど唾唾腰の鈴吉、

「さア三浦さん」

「何ぢや」

「何ぢやで済みますか、お約束ですから手紙の上書をして下さい」

「區役所の代書に頼むと安いぜ」

「あら、覚えて在らツしやるの」

「ふざけるな、覚えるも覚えなにも現に今、言ツたばかりぢやないか」

「ほゝゝゝあれはね三浦さん、わたし前後したんですよ、實は島田さんの居處を書いて貰つた後で、さういふ筈でしたのを、つい、うツかり前に言ツて仕舞ひましたの、取消しますワ」

「さう／＼しい女だな、取消といふものは人を馬鹿にした申譯で、新聞屋の専賣特許にな

ツてるもんだぞ、かりにも愛敬家業の藝妓で居ながら、そんな事を口にする女があるかい」

「御安心下さい、これでも三浦さん少しは世間を心得て居ますから外へは使ひませんよ」

「は、ムム、どうも今日は受太刀になる、戦ひ利あらず、もう斬合は止さう、ぢやア望み通り上書してやるから手紙を出せ」

「ありがたう、これへ願ひます」

「こりやア袋だけだね」

「その状袋へ書いて戴けば、わたし中味を入れて歸途に投り込みますワ、どうせ手紙は固く封じてあるんですから、お目にかけても掛けなくツても同じでせう」

「まア出せ、どのくらゐ厚味があるか、中の文句は見なくても凡そ日方で考へる事があ

る、實は我輩も用があるから一處に封じて出さう」

「そんな事、わざわざ考へなくツても宜しい、もし御用があれば貴君は貴君で別に書いて、お出しなさいよ、一緒に封じ込めたりなしかして、こんがらがる、いけませんわ、玉石混合といふぢやありませんか」

「こら玉石混合、何處で聞いて來た、第一また玉と石は、どう分けるんだ」

「そりやア知れて居ますよ、いくら冗談半分に平生は悪戯けて居らしても、いざとなれば立派な貴君ですもの、こゝといふ急所だけは突いても押しても固くツて動かない、石のやうなものでせう、ところで三浦さん、わたしは玉」

「は、ア我輩が石で、お前が玉かね」

「玉ですワ、その證據には頭髮を見て下さい、根掛けは珊瑚珠の玉、髻は翡翠の玉、指

環にダイヤは却つて氣觸ですから、この通り、わたし眞珠が好きですの、家には大きな水晶の玉もあります、それよりは島田さんに貰つた鶏血の玉まだ大事に持つて居ますよ、あれを三浦さん何に使つたら宜いでせうね、をりくこれで生意氣に、わたし玉突も遣りますワ」

「いカン、いカン、今日は我輩の厄日で、めちやくくだ」

戀の力には流石の瓢箪鮫も竟に押へ付けられ、いよく島田一雄に届くべき秘密の場所を認めし三浦安一、此時ばかりは眞面目に膝を組合して首を前に突出しながら、

「別に悪い事をして遁げ匿れもしないんだから、誰に知れても構はない筈だがね、内地と違つて、あゝいふ土地だし第一また島田の立場としては今が最も大切な時期で、この暫くの間、その動作を人に知らしたくない理由があるんだ、加之も新聞といふ飛耳長目が

あつて、それく向ふにも通信員が居るからね、猶更ら秘密を要する場合だよ、わかつたね」

いつにない鈴吉も靜に首肯いて、我息を呑込みながら、

「わかりました、三浦さん、御安心なすつて下さい、どんな事があつても、わたしの口から世間へ漏れる氣遣ひはなし、また今日この上封を書いて頂いたつて、それを好い事にして自分の勝手には手紙を出しませんから、出す時は必ず貴君に御相談した上で」

「さうだ、一旦さうして居處を書いてやつた以上、いくら勝手に出しても宜いやうなものだが、いち／＼我輩に相談するところに即ち、お前といふものがあるんだ、つまり普通の男を持つた普通の女ぢやア、さらにある藝妓が男道樂をすると同じ事になるからね、そこは島田一雄と鈴吉だ、また粹を利かして取持つ役が我輩だ、ごろく其處等邊に轉

「がツてる出来合の色戀たア違ッてる苦だ、はゝゝゝ」

「全くですワ、これで三浦さん、どツちか意氣地なしの弱蟲だツたら逆も今日まで互ひに續くもんですか、人に意見されて止めるか、双方の魂が盡きて自然に別れるか、もしさうでなければ腐れ縁の遣り場がなくなッて情死の眞似事ぐらゐ仕て居ますよ、ほんたうに三浦さん、わたし二三度は死んで仕舞はうかと考へた時がありましたもの、馬鹿々々しい、これほど一生懸命に惚れて居ながら、まだ夫婦にもなれず陰で苦勞ばかりするかと思ひましてねエ」

「おいゝゝ、好い加減にしろ、ちよいと優しくいへば、すぐそれだ、ま何といふ困ツた女だらう、もう川が濟んだんだから餘計な事を儻舌らすに、さツさと早く歸れよ、島田と腐れ縁は面白い事のあツた後だから宜いが、川のある時だけ引出される我輩への腐れ縁は眞ツ平だ、これで情死の眞似事でも仕られて見ろ、目も當てられないぜ、はッはッはッ」

「だツて三浦さん、かう夢中になツて居て、もし萬一あの島田さんに捨てられでもして御覽なさい、勢ひ貴君へ取ツ付くより外に仕方ありませんからね、戀でなくても前世の約束、やはり腐れ縁は放れませんよ、御迷惑でも其のお覺悟で」

「よしゝゝ、其覺悟で居てやるから早く歸れ、うかゝして手紙を落すな」  
「大丈夫、生命は落しても三浦さん、これだけは落しませんワ、ほゝゝゝ」

古き薄鼠の色の襦たる中折帽を聊か傾けて眉深に戴き、蒼白く瘦せたる神經質の顔に金縁の目鏡を光らせ、羽織は夏のまゝの薄物なれど着物は秋口の袷に髪は浅き仕入のセル袴、



女物かと思はるゝゴム草履に瓜頭の黒づみし白足袋、片手を懐中に片手には露店の選出ししい細きステッキ、年頃は三十前後、わざと反返りて歩けど背筋は老人の如く自然に曲りて、首と肩との肉が續かず谷の如くに凹める工合、もし裸にすれば骨と皮、醫學上よりは慥に何等かの病體、

されど本人の自尊心の強壯體を文化なき野蠻人の如くに卑しめる顔色、ありくくと鼻頭の目鏡越に現はして、いかにも高尚めいたる態度を失はじと、足音もなく静に入り來りて植重の顔を見るや否、瘦せたる身を枯木の如くに止め、尖れる顎を突くが如くに差出し、飢饉猿の表情に等しき微笑を浮かべながら、

「どうだね、この邊へは暫く來なかつたが、やはり來て見ると悪くない、わけて今日は空も高いし木の葉の色も冴えて、そろ／＼秋の氣分を味ひ得られるからね」

植重は俄に頬冠りを取つて軽く腰を屈め、

「や、お珍らしい、近來は先生、どちらに在らっしゃいます」

「巢鴨の宮下に居るからね、ちよいと來るには、あまり遠過ぎるよ、ところが今日は久しぶりで淺草の俗地を見たいといふ厄介なものがあつて、それを連れて來たんだよ、はゝはゝゝゝ」

「其お連れ様は、どうなさいました」

「面倒だからね、雷門から歸して僕だけ一人、ぶら／＼遣つて來たが随分、草臥れるね」

「どうせ入らっしゃるなら、御一緒の方が宜う御坐いましたに」

「なアに女だからね」

「おや、その後、奥様でも先生、お迎へになりましたか」

無遠慮

「いや、妻でもないがね」

「他人でもないかと仰しやるのでせう、はゝゝゝそれなら猶、拜まして頂くんでしたに、惜しい事をしましたよ、先生のこつてすから定めて、お歳の若い奇麗な方でせう、はゝゝゝ」

「また連れて来る事もあるだらう」

「兎も角も先生、相變らずの番茶でも召上つて、さア彼處へ」

「ぢやア休まして貰はう」

其まゝ奥の縁端へ行く姿を、すれ違ひの三浦要一、後より來れる植重に向ひ、

「ありやア何だい、病人か」

植重は俄に聲を潜めて、

「あれは小説家なんですよ、この近くに去年まで居て、をりくゝ來たんですが實は蟲の好かない嫌な奴でしてね」

「はゝゝゝ、いはゆる文士なるもんだね、小説では何といふ名だ」

「瀬田憧憬といふんですよ」

「憧憬、なるほど、世の中の實際を離れた總ての夢のやうな事に憧れてばかり居る奴だな、はゝゝゝ」

天下の文豪、小説の大家、第一流の瀬田憧憬先生は我なりといふ心の誇りを鼻頭の目鏡越しに光らせて、實際は借家住居の家賃に追はれ米鹽の責苦に逢ひながら、あらゆる總ての物質上を汚らはしきものとせる顔色を現はし、夜半の鼠にも驚いて飛上れど、見たところは靜かに澄まし込んで急かす慌てず悠々たる態度を示し、をりくゝ用もない初秋の蒼空を詩

的に仰いで、いにかも一足づゝに意義ありげの歩き振を、髯面の中より冷かなる目に見送りし三浦要一、ぶツと思はず吹出して、

「こりや面白い奴が来たわい、なるほど、ふゝウ、あれが小説家の瀬田憧憬といふのか、植木屋といふ家業は近來の大きな呉服屋と同じで錢を取らずに縦覽隨意だから絶えず、いろんな人間も這入ッて来るが、まア今日の彼奴なんかア珍客の方だね、はゝゝゝこれまで小説は睡れない時の眠り薬として讀んだ事はあるが我輩まだ直接に小説家と話した事がない、幸ひだ引合してくれ、どういふ聲を出して、どんな事をいふか、よほど違ッてるだらう」

植重は頻りに片手を振りながら、

「いけませんよ三浦さん、通り掛りで冷かしの這入ッた奴なら随分、からかつても宜うがす

が、この邊に去年まで住んで居て、よく知ッてるんですからね、第一また鳥ぢやアあるまいし、どんな聲を出すは酷い、やはり人間の聲を出しますよ、いやに乙う澄まし込んで氣觸ですがね、決して人は悪くありませんぜ、たゞ獨り得意で自分より豪いものはないと思ッてるだけのこツてすから、それさへ除けて遣れば罪も報いもないモンでさアね」

「無論、悪い筈はなからう、どうせ大體は神經質に氣の小さい加之も世間知らずの好人物に極ツてるが、まア兎も角も我輩に引合してくれ、同じ小説家の中でも憧憬といふ名が面白い、あの面で年が年中、何に憧れて何に觸れてるのか、慰み半分それを聞いて見たインだよ」

「慰み半分は猶更ら困りますよ、わけて貴君の口に掛ツちやア堪らない、あれで居て本人は至極眞面目なんですからね、ちよいとした尻のやうな事でも氣に觸へて、すぐに泣い

たり怒ツたり仕ますぜ」

「その代り、ちよいとした屁のやうな事でも譽めてやれば、有頂天になツて喜ぶだらう」

「さういへば差引勘定、さうですがね、なるべくなら三浦さん、觸らないで置いて下さいよ、一方は木の枝から枯ツ葉が散ツて來ても頻りに首を捻ツたり腕を組んだりする人間

で、一方は天地が崩れて來ても平氣な貴君でせう、どうしたツて巧く談話の合ツて行く筈はありませんよ、もし變な工合になれば第一この植重、中間で挨拶に困りますよ」

「さう心配するな、あゝいふ人間は我輩また平生の三浦でなく、あゝいふ人間として話

すからね、むづかしくいへば相手の自尊心を傷けないやう、つまり上手に茶かして持上

げてやれば奴さん、悦に入るんだらう、はゝゝゝ」

ぬらゝとして何處に急所があるやら押へどころのない三浦要一、ちよいと突いても身體

中神経質に忽ち驚いて飛上る小説家の瀬田憧憬、この兩人が植重に引合されて同じ線端に腰うち掛けながら、互ひに始めての挨拶、

「君が名高い小説家の憧憬先生ですか、をりゝ新聞や雑誌で承知して居りますが實際、

かうして直接お目に掛るのは始めてだ、我輩は三浦といふもので、近來この植重の厄介

になツた、いはゆる食客的なるもんです、はゝゝゝ」

絶えず先生の御高著を拜讀して日夜渴仰の念に堪へませぬと尊敬せらるべきところを、を

りゝ新聞雑誌で見るといはれし言葉が第一の氣に入らぬ顔色、目鏡越の斜めに三浦の髯

面を輕視して、其まゝ眞正面の植重を見ながら、

「はゝア、さうですか、僕は餘儀なく頼まれて仕方なく新聞や雑誌へ筆を執ツた事もあり

ますが、寧ろ單行の出版物で出した方が多い筈です、最近に僕の書いたものでは、何を

見ましたね、自分の本領として著はす時は通俗的でないから、眞の藝術を解せない一般の低級者には逆も分らないところがあるでせう」

この憧れ野郎、盲目蛇に怖ぢず、ふざけた事を吐すと思へど、わざと眞面目に首を捻りながら、

「先生の著はされた中で、どれが一番、お得意ですかね」

「別段、どれといふ事も出来ないが、僕の著述は一切の技巧を避けて、ありのままを偽らず飾らず自然的に人間の最も純なる眞情を告白させてあるが、まづ最近に於ける先々月の出版で（破れたる心）あれは随分、やかましく騒がれて批評家の問題にも研究にもなつて居る、それだけ僕もまた大に熱を持つた自信の作物ですよ」

「破れたる心、あまり病氣に熱を持ち過ぎて心臓でも破裂した事を書いたのですが、實は

先生、最近にも最遠にも先生の著書を読んだ事はないんですから、お世辭のないところを露骨に申せば、たゞ憧憬といふ小説家の名を何かの拍子に、ちよいと見て記憶して居るだけのことですが、去年この邊に住んで居て久しぶりに今あれへ來たといふ事を植重に聞きましたからね、幸ひ用はなし、どんな人かと思つて、はゝゝゝなるほど、ぐゞゝ生かして置いて面倒な事を書くよりも、心臓破裂の小説は面白いでせうな」

憧憬先生、七面鳥の如く赤くなり青くなりて、自己まづ心臓の破裂せんばかりに亢奮せる顔色、急には物もいへず、ぶる／＼と身體中を震はしながら、

「けゝけしからん、君は全體、どういふ理由で、いやしくも文學者たるものに何のため、さういふ無禮な言を吐くんだ、聞捨にならん、ぶゞ侮辱も侮辱、僕一人に對する侮辱でないぞ」

「こりやア驚いた、大變お氣に觸つたやうですが、決して侮辱も無禮も仕ない筈です、破れたる心といふから只その文字を單純な頭腦で解釋して、心臓破裂の小説ですかと聞いたばかりで、其外に何等の理由も仔細ありませんよ、おい植重、ちよいと來てくれ、先生に敬意を拂ひ損ねて、とんだ失策を遣つた」

あくまで自尊の強き憧憬先生、ろくに食ふものも食はず寝る目も寝ずに心血を注いで、これこそ文壇の權威とし社會の驚異に値すべきものと誇れる傑作（破れたる心）を心臓破裂の小説かといはれて、あまりの侮辱に電氣仕掛の如く身體中を震はし、悲憤の極に一種の怪しき亢奮状態を呈しながら、ぼろ／＼と涙を流し出せば、流石の三浦も聊か驚いて俄に敬意を表し言葉を改め、

「先生、兎も角も先生、よく落付いて聞いて下さい、決して我輩は先生に無禮の言を吐い

たり侮辱したりするだけの資格すらもないんですよ、考へて御覽なさい今日この歳で、この髯を生じて自分一人の居處もなく、まご／＼した果を植木屋の厄介になつてるほどの人間ですもの、いやしくも文壇の大家に向つて冷かしたり茶かしたりする事が出来ますか、それに第一また不幸にして先生の著作物を拜見した事ありませんから、破れたる心といふ題を淺薄なる文字通りに心臓破裂の小説かと申しましたので、その他に何の意味もないんですよ、は／＼／＼どうか先生、あしからず」

わざと身を居縮め頭を下げ頻りに先生々々と、くそ丁寧に祭り込めば、今更ら去るにも去れず、漸く落着いて次第に顔色を和らげしが、楮かうなれば嫌でも雅量を示すより外に立場のない憧憬先生、

「全く君、さう思つて出た言葉か、困るねエ、君のやうな頭腦を持つた人が随分まだ多い

「だから、純なる藝術と通俗の世間とは、よほど隔たりがあり過ぎるよ、はゝゝゝつまり君、破れたる心といふ意味はね、心臓破裂なんて、そんな低級な單調な素人臭い醫學的の初歩に解釋さるべきモンでない、ホツと底深い人生の心に潜む或物を不完全なる社會組織のため破壊されるといふ點に筆を執つた小説で、それが即ち破れたる心さ、實は破られたる心として宜いんだ」

「なるほど、ちよいと小説の表紙に現はれた題だけでも、さういふ難かしい深い意味があるとするれば、なか／＼讀んでも急には分りますまいな」

「さう、まづ君の程度ではね、はゝゝゝ」

「だが先生、一般に分らないものは、どうしても廣く賣れないでせう」

「僕は多く廣く賣るために筆を執らない、妙くとも共鳴の知己を得れば宜しい」

「ですが多く賣れないとすれば先生、お骨折の割に収入も思ふ通りには」

「おい君、そんな卑しい事を、収入なんか、どうでも構はン、總ての物質に超越してる瀬田憧憬、たゞ自分の誇りとする藝術のために生きてるんだから、藝術以外に僕の生命は

ないよ」

「藝術のために生さてる先生、藝術以外に生命のない先生、もし其藝術を奪へば直ぐに死ぬますか、献身的に惚れた女と情死するにも、なか／＼容易に死ねないもんださうですぜ、はゝゝゝ文士商賣をする小説屋なんかといふものは、さのみ毒も悪氣もなからうが、一種の誇大妄想的に嘘を吐く癖が常習性になつてららしい、満足に生きても居られない奴が立派に死ぬるもンか、生死は人間の大事だ、原稿を書いたり校正したりするんとは違つてるぞ、どうだい、憧れ先生、はツはツはツ」

「文士商賣、小説屋、憧れ先生とは何だ」

「夫子、それ自らの事なり、はゝゝゝ」

擒縦自在の果は翻弄一番、憧れ先生といはれたるを、讀んで字の如しとは思はず、ぶり／＼怒りながら出で行く後より、のそ／＼門口まで送り出せし三浦要一のため、猶更ら念入の追打に侮辱されたるが如く、實は遁げ出すが如く足早に立去りしを後姿を冷かに見送り、つゞいて來りし植重を振り返りながら、

「よほど怒つたね、はゝゝゝあゝいふ人間は極端に喜んだり怒つたりする外、どうしても平氣で居れないもンと見える、なるほど自家廣告の通り單純な感情一片で生命を持つてゐるんだが、この複雑なる激烈の社會に對しては實に危い人生を渡つてゐるよ、うか／＼すれば直ぐ氣が觸れて變になつたり半狂氣になつたりする筈だ、大きく離れて見ると、ま

るで懸崖の上に幼稚園の生徒が手を叩いて遊んでるやうなもンでね、はら／＼するよ」

「幼稚園か何か知らないが困りましたね三浦さん、あれちやア植重の出場がない、二度と再び來て貰はなくつても宜い人ですが、あんまり酷い、同じこつて怒らすより喜ばした方が功德になりますよ」

「同じ事なら、どツちでも宜からう、怒つたから早く歸つたんだぜ、もし喜んで長く居られちやア奴さん、好い氣になつて何を言ひ出すか知れないよ、あれはね、あゝいふ仲間以外に通用しない一種特別の頭惱に出來てるんだからね、没交渉の世間へ出て一人前に話さうなんて、間違つた考へだ、本人は自尊心を傷けられたとか侮辱されたとか思つてゐるが、をり／＼鼻ツ柱を曲げてやるのが却て身の爲になるよ、はゝゝゝ」

笑ひながら伴うて入らんとせし時、生垣の角に俵を乗捨てしは高橋しげ子、三浦は目早く



認めて、

「やア來たく、女優の卵子、えらく盛粧して來たぞ、だが仲を彼處で降りて生垣の横へ廻さした工合、威張損ツた今の文士先生よりは伶俐で可愛いとところがあるよ」  
わざと大きく片手を舉げて招きながら、近づく姿を髯面の微笑に迎へて、

「綺麗々々、ちよいとの間に大變、女ツ振を上げたよ、なるほど、こりやアこれに合ツてるわい、しつかり稽古してるかね」

しげ子は小腰を屈めて、會釋の額越に仰ぎながら、

「はい、おかげさまで」

「おかげさまは我輩でない、岡本だが其おかげさま正直に近ごろ來ないよ、どうしてるね無論、毎日逢ツてるだらう、はゝゝゝ」

しげ子は俄に顔を赤めながら、それには答へず植重への挨拶、

「も少し早く、お伺ひする筈ですが、やはり體に暇が御坐いませので」

「なアに忙しくツても暇のないのが何よりですよ、ねエ三浦さん」

「さうだとも、さうなツた以上、その顔で暇なんかあツちやア、ためにならない、修業中夜は草臥れて前後も知らず寝るやうでない、ろくな眞似を覺えないからね、日が暮れて、のそくと歩くな、はゝゝゝ」

わづかの日數なれど、元來の素質を備へて、春の芽を吹くが如く、いかにも女優らしき表情となれる高橋しげ子、三浦と植重の二人に向ひながら、

「いろく御厄介になりました野田さんは、その後、どうしたで御坐いませう、あれから一度も伺ひませんの」

三浦は髻面の微笑を浮べて、

「さア彼奴、どうなツたかね、無論まだ凹垂れてるに相違なからうが、やはり抱合ツて泣いた事のある男は忘れれないと見えるな、さう綺麗になツたところを見ると今度は死物狂ひで武者振り付きに来るぞ、うか／＼するな川心しろ、は／＼」

「あら、まア、ほ／＼いゝ實はあの野田さんが、あ／＼なツた相手の川口よし子といふ女に今日、トンでもない場所、ふと逢ひましてね、ちやんと居處も聞いて置いたので御坐いますよ、知らしてあげて善いか悪いか存じませんが、もし野田さん、此方へ伺へばと思ひまして、あのま／＼では、いくら何でも、あんまりですもの」

「こりやア面白い、ふ／＼、どこで逢ツた、今ア何をしてる、なア植重、去るもの日々に疎して本人としては知らないに限るが、かはいさうに、あ／＼まで酷く仕やアがツた相手

だ、ちよと喝かしてやりたい氣がするね」

「全くですよ畜生、男の意久地なしは別として、ふざけた阿魔だ、嫌なら嫌で氣の變るも宜いが、約束をして置きながら、わざ／＼この東京まで引ッ張り出したものに一度も面を見せず、おまけに外の男と自動車で乳くり合ツたところを見せるなんて、いかにも念入に薄情な女だ、其女の居處が知れた以上、野田は兎も角、わッしやア承知が出来ねエ、こ、は三浦さん、どうしても貴君の智慧で一番、敵を討ツてやツて下さい」

「は／＼、智慧も工夫も入るもんか、第一また敵を討つほどの女でもないがね、一方が馬鹿正直の凹垂れた間ぬけ野郎だけに猶更、相手の女が癩に觸るよ、境遇の習慣上、男を欺したり嘴で吐出す事を殆ど商賣のやうに心得てるもんならばだが、まだ十九や二十歳の女學生あがり、生意氣な真似をする女だ、全體何處に居るい」

「こゝへ伺はうと思つて、淺草の雷門前で電車や何かの混雑に、ちよいと俵の止まりま  
 した時、よしさんの方から不意に聲をかけられました、あらまアと、それから俵を降り  
 て、いろく立話しを仕たのですが、わざと野田さんの事をいはないモンですから、向  
 ふは大變な誇りなんでせうよ、今は名高い小説家で、瀬田憧憬といふ人の愛に抱擁され  
 て、巢鴨の宮下に居りますと、さも自慢らしく」

三浦は思はず膝を叩いて、  
 「面白いな、ますく面白いな」  
 植重も思はず横手を拍つて、  
 「ななるほど、道理で今日は淺草まで女を連れて来たといひましたよ」

巢鴨宮下の外れは新築の長屋、いはゆる腰辨なるもの、便利を主として建てたる五軒つゞ  
 きの二軒目、實は腰辨よりも不安の境遇ながら時間責の動物にあらずと澄し込で、表札  
 にも戸籍而の名を用ひず瀬田憧憬といふ雅號を掲げ、天晴れ文學者たるの權威を示せど、  
 その權威は常に家賃のため取消され米屋のために蹂躪られてをりく先生の面目は丸潰れ  
 の苦しき、

それのみならず、全身の愛を捧げ合うて互の性格を理解し互の趣味も一致せし筈の夫人、  
 否、奥様、否、内縁の妻、そこまでの手数もなく轉び合ひし相手の女、川口よし子のため  
 今更ら貧乏の不足と共に性格を無視され趣味の相違を持出されて、あはれ憧憬先は内憂  
 外患の眞ツ最中、  
 今日も或雜誌に約束せし締切の時日切迫、一閑張の机に對うて四苦八苦の顔色、半月の糧

にも足らざる収入に萬年筆を走らせ、ことし三十一といふ年輩なれど二十五枚と制限されたる原稿紙のため、ますく神經衰弱の度を進め行く背後より、これは正反對の肉感的に充實せる廂髪の亂れ毛を掻き上げて、

「あなた、あなた、ちよいと、あなた」

薄暗き横町より卑しき手招きの聲に等しく、あなたくと續けざまに呼ばれて、眉を擧めながら振り返り、

「何だよ」

「何だぢやありませんよ、どうなさるの、今日といふ約束を、もし今日中に幾何か持つて行かなければ、いよく立退を請求すると念に念を押されたのですからね」

「うるさいな」

「おや、うるさい、うるさいで済みますか、お米や夕のものゝ塞がったのは一時まだ餘所で取れもしますが、住宅難の今日、家ばかりは急に探したツて無効ですよ」

「だから今、この通り一生懸命になつて筆を執つてゐるぢやアないか」

「その原稿は全體、幾何になるんです」

「幾何になるツて、そんな卑俗な事を尋ねられては困るよ、不換金ともいふべき藝術のため生きてるんだからね」

「困るツて、あなたよりは實際、わたしの方が困りますよ、あなたは藝術の誇りに生きて居ても、毎日々々、かう直接に絶えず間斷なく衣食住の迫害を受ける身となつて御覽なさい、趣味も何もありますかね、あなたは始め、わたしに對して、書生や下女なんか置くと却つて蒼蠅く面倒だから二人で楽しく愉快に暮さうと」